片

2
0
2
5

u_

# 一月

落ちて来た儘に黙る石のように　声を尖らせたり震えたりさせられるのは
初めて叫んだ時の事を憶えて居るからだ　なんて
嘘を言い出して嘘の痛みを叫びと重ねようとして
濁った光りに溶けて消えたのは何だったろう　きっと
憶えてなどいない事を憶えが有ると態と見誤り己に向けて言い張って　な
無い事に呑み込まれて何も戻って来られない　いや
こんな言い草も有りもしない古い叫びを拵え直そうと為ているだけか
けれどそれでも　溶けて消えるばかりな違う何かを追うしか無いのなら
見上げる程でも無く流れ下る辺りに　丸くなろう丸くなろうとして却って
角張ったりもする　まざまざと柔らかそうな首が真っ直ぐこちらを向いて
小さな口を如何にも狭そうに真っ赤に　開けるだけ開けて

疾っくに断ち切られた筈の血塗れたろう肩などを輪のように軽軽と回して
それは
窪んで掘られても行くようなら暗い水で　確かに
水も漏らさず塞がれて居るようで　その完き有様に耐えられないかに
其処へ入って行くのか　其処へ出て行くのか　それは
どちらもどちらと目まぐるしく入れ換わって
換わる程に　静まり返って小さな限りに一つの
通り道　いや
通り道　でだけは無い
通り道　と認めたくても　それがそれの妨げと為って
堕ちながらに昇って行く先の　先とは距たる辺りなら
憶えて居よう
求めた通りに身に随う暗みの底を舐めるようにも厭きない
其処へ来ての行き成りの道は果て　また還って行く姿の
足なら有りそうな足取りばかりは鮮やかに明るんで　嬉しい幻かに
刎ねられた首が幾つも入れ換わって已まないようなら
それは
水の上っ面を漂うかにも　堕ちる影は真下へ消え懸けて刃と研がれるかで

水の底を突き刺さり更に下り続けて汚れ果てるように　根なら根を張って
己が眠りに呑まれよう呑まれようと　けれど
な望みは乞われる程に腐るようにも何時までも叶わない儘に　其処を
独り切りで通り過ぎようとする誰もが殺される楽しげな数数の眺めの
一つ一つに全く易易と唯　見入っては居る
二〇二五年一月十五日

一度殺されるなら　必ず
再び殺されなければならない
ならば
一度殺される　とは
生きる事を言っているのか
再び殺された誰かが首を捻って　と
な誰かは誰かを誰かとも知れず誰かで
な儘に　殺され生きるのを待つような
待ち尽きたような

二〇二五年一月十六日　一度（ひとたび）

磨かれようとして蕩けて行く奥
を匿い抱えて　静かに喜ばれて居た
確と喜ばれて行った　継ぎ目も無く滑らかな
脹れて形を整える　時か
に心付いた事は無かった　形
それとも時と形が侵し合って
喜びだけが悲しい奥を覗かせるかに残され　尚も
磨かれようとされるのを已めない戯れ合い　けれど
すっかり透き通るしか無い時なら形なら
すっかり始めから誰も居なかったような
甘く淡い薫りの断ち切られた痕から滲む
暗い色が垂れ下がるように角張るように
うっかり見直せば恥じるしか無いような
汚れた縁ばかりが荒荒しく　けれど

荒荒しさは古びるしか無く　けれど
覆いを取り払えば暗いばかりな鏡が立て掛けられ
目映く丸く回り続けるらしいぎらりと曇りの無い
安らぎを偽る　粘粘と骨に絡み付き血を濁らせる
けれど
予め隙も疵も無く白白と出来上がって居たからは
形は　そうと定められただけ時に削られ歪められ
暗いばかりな鏡に映る筈も無いと知りながら　な
知らぬ顔を柔らかく振り翳して　それは
惨く辛い顔を何の事でも無く隠す為かに

※

冷たいそれに触れる　その
冷たさは　冬の凍て付く寒さとも氷とも違う
引き裂かれるかにも柔らかく指を撫でて　その
柔らかさが何処へ何処まで届けられるか
きっと知らなければならないけれど知れないとも直ぐに知れる　そうして

引き裂かれるしか無い穢れた息で窒がれた　明明と陽の広く差す北向きの
高くも無い高さばかりを測ろうとして危うげにも汚れ
汚れは汚れを呼び招いて幼い頃からずっと火を遠ざけて居たのを思い出させる
いや　火では無く燃えるように冷たく噴き尖る氷だったか　その
氷を火と言い換えて見る　と見える先に逆さに月のように欠けて行く陽の
冷たさに触れる　それは
痺れるように硬く震えて
すっかり夜だったんだ　始めから
と今更に分かって見れば見ただけ
冷たさは指を舐めて
冷たさはその儘消え
消える冷たさばかりは　易易と透けるように染み通り
黙り通して遂に　いや冷たさとは逆さな声を叫び求めたろう　そうして
やはり黙り通して　触れられる冷たさだけを残して行った姿　いや
ならばもう　姿の抜け殻で居続けるしか無くに弛弛と
全く止まったようにもやはり弛弛と朽ちて行く　それは
二〇二五年一月二十九日

走り已まない影が嘘のように隠されながら途切れず流れる冷たさ
を隠し持たされるしか無い儘に　硬く冷たくなって行く身を
胸の底の重みで　汚れ果てた間を置いては揺さぶって
何も見ない目で見詰めるらしい先の　何処とも繋がらない重みと
何やら身に浸みる　けれど身を断つような遣り取りを
粗く空回りな　ざらりとした膚触りで
また更に　止まるよりもゆっくりかとも硬くして行く
かに
そうして滑るように知らされるのは唯
何も変わらない事　けれど必ず直ぐにも変わる事
それを　いや　それが
誤って撃たれるように身をぐらりと揺らがせては
透けるように触れられないように続いて行く　それは
確かに唯　冷たくて
ふわりと冷たい儘に　何処へでも持ち運べそうで　その
静かさ限りな　ふわりと重い息の痕では…

二〇二五年一月三十日

見えないものは　もう見えない
見えるものの他に何も見えないとは　何という事だろう
見えるものは　どれも動かない　そうして
それを見る目にも動かないのを強いて来る　けれど凝っと
そう強いて来るとは見えるなら　目はまだ
動いて居る‥　違うか
それとも　動かない目に見える何が有るだろう
動かない目にしか見えない何かが有るだろうか
それは隠されて居るなら何が隠されるのだろう
何も隠されてなど居ない　何故なら
見えるものと見えないものはもう
互いに何の係わりも持たない異なるものだから　で
其処に
何処かは知れないが

知れないなら知ろうとして限り無く
見るのを窮められ　見えないのも窮められ　けれど
窮められる事など　何処にでも幾らでも有るしか無い厭わしい事で
それを見て見ない目で目なら　動かなければならない筈も無くに
見えない見えないものの見ようとされる冷たさだけを見通して居るようで
二〇二五年一月三十一日

二月

己の目に呑み込まれて行くなら　その
目の己は　もう己から離れて　それとも離れようと動かずに居て
その唯目だけの中を細身を拗らせ　遡って行く
な目では目と呼ばれようと　きっと少しも目として動いて居ない
それとも始めから目では無くて　其処を（何処を？

何かが　何かな限りに悉くを激しく落ちる水の影のように引き摺って
）なのに　狭く角角しい中に蹲り掛けては
荒い息を衝き尖らせ緊く斜めに圧し立てて
まだ目は閉じられない　もう目は閉ざされない　な
硬い周りと啀み合っては　虚しさだけを頼りに心を合わせるしか無く
何も変わらないかに疾っくに変わって仕舞って　取り替えようも無く
二〇二五年二月一日

目を通って　その奥へ
襲おうとした親鳥の後ろめたくも雛でも孵す構えで（いや
襲おうとした夢と独りで取っ組み合って居るだけなら　と）
居処を拵える身は　海を掠める陸を越えて行く
な陸が自ずと傾き風に捲られそうな
緩やかな夢にも為らない夢に隠るのでも夢に見て
な夢は滅びる身より早くに失せように
な事からは目を背け　けれどその

背かれた目の内に身はすっかりもう固まって居ように
目の奥でか何やら偽りに騒がしい微かな蠢きの届いて
丸めた背から翼を生やすのは失せた夢より
もっと夢かな
もっと夢ならもう夢では無い
ならもうそれは跳ね回ろうとするならきっと
翼を生やすなど訳ない生き物に違いない
と勇んで　撃たれるように見えて来て仕舞う　それは
吐かれるばかりの息を手繰り寄せる
吸われるばかりの息の睨め回すような思いで
思いばかりでは思いの内に思いは自らを殺め
ずっと凄まじく冷えて已まない手足の冷えの
目の奥へ向かって襲い掛かって来る血も固めよう勢いを
陸を掠める海へ逃がそうとでも為たいのか唯
息を　途切れ…途切れ…に抛り放ち
跳ね飛ばすのは　殺めた思いへ還ろうとして居るのかを
自らに尋ねる為にまた　思いは思いを殺めて已まないようで
二〇二五年二月二日　陸（おか）

な幻を
口に含み　流れる脹らみなら何とか食べられようかと涎を垂らすように
な流れに　知らず身は未だ逆らう構えだけは崩さずに
目の中に　骨を探す
それ程に　目はすっかり白い骨で
見えない外の冷たい筈の風に煽られるのは何だろう
と訝る何時もの癖に小さく震えては　その震えに隠り
震え已むのにも微かな目配せが利いて居よう
な骨の目へ戻って行く眺めに　また外の風の響きが鳴るなら鳴るで
鳴る程に背は強張って厭われながらも懐かしくにも
な懐かしさは思い描こうと心を傾からせれば却って頽れ　身は囚われ
な事を見ようとして仕舞う目は自らを潰したいかに
骨を目から圧し出そうかと煌めこうか
な煌めきの暗く鈍い　まるで遅過ぎる息遣いを掠め逸れ　それで
眺めは疾っくに目を見棄てて怯えてさえ居るのは確かだろう　と

知るなら知る　目など見向きもしない遠い風を映すらしくも　唯
冷たいだけとさえも知れない
遠い風までの眺めの虚ろに骨に換えられて行く
遅い息遣いよりもっと遅かろう　遅い程に後に何も残さない時の移り行きは
果てなく冷えて行く身を煽るように　静かな骨の音の繰り返しに
挫けてはまた甦る筈も無い程に　弱弱しく甦る
な繰り返しを嘲笑うようなのは　遠い時の外より必ず外の
二〇二五年二月三日

硬く拡げられて行く身が硬いより硬いのなら　硬い先まで見え過ぎて
見えない程に微かに柔らかく閉ざされて行く　その
行く　とは何だろう
誰が何処へ行くでも無かろうに　何もが其処に
押し黙って　何の思いも疾っくに洗い流されて
行く　はそれでも何処かを
行く　のかそれとも

身は今にも既に身を捉えている虚ろに頽れ拡げられる　いやもうその最中で
な最中を行くのは喉を溢れてだけ知れる腐り凝るしか無い時の
項垂れ驕る　それでも押し黙るなら腐る構えの身を劈くらしい
声のようで　声なら何処へか行こうけれど
声のようで　声で無いのも確かで　いや少しも
声のようでなど無い　と何が
声のようかを探そうとも　唯
拡げられて行く身が閉ざされて行く
の他には何も無い　と知れるだけで仮に声なら声は
他には何も無い　とは呟けようか何処へも行けずに　ぁあ
な声でも掠れて声で無くてさえも乞われて居よう　それは
拡げられて行く身が閉ざされて行くの
行くのを暫しでも留めて呉れように
声のようで　さえ掻き消されるなら
孰れは身も失せて唯
行く　だけが行くのを止めようも無く
行く　だけを止めようが無くて他の悉くを止め尽くすに違いない
二〇二五年二月四日

唯一つ
行く　に魁けて
脇へ脇へと逸れ懸けては偏り已まずにも踏ん張って
踏ん張り滑って　滑り果てた勢いで高みへ飛び移って
陽の暖かさをぴたりと真横に浴びる構えで
真っ直ぐな限りに　緊く揺るぎなく丸まって
に丸まる身の奥に滲み凝る重みは
眠りの光りを放ち
な光りが絶えれば
浮かれた幻かに擬えられる一つ限りな丸まりへ向けて
眠りは　嬉しげに裂かれ窮まるように醒まされる
二〇二五年二月五日

眠るのとも醒めるのとも違う事を
眠ると醒めるの重ね合わさる処で待って居る
それは　もうすぐ其処まで迫って居ると分かりながら
そうして　それは唯そうして居るだけで
始めから何一つ失っては居なかったとも分かって　それで
安らおうか却って苦しもうか　どちらかを選ぶ心構えも既に失せ
ならばそれを待つ心構えももう　有っても無くても良いようで
けれど心構えには変わりは無い　未だその事が来ない内は
二〇二五年二月六日

そっと
始まりの息を辿ろうと探す　けれど（その
そっと　からして惨くも荒げられ喉を陰と敷き塞ぐ塊だった　で）
始まりの息の更に始まりの
始まりの息とは異なる　きっと
泡では無い泡が　な泡を貫いて

始まりの息へと抜け出して行こうとする　な　けれどきっと
それは唯の始まりの息を乞い求めるしか無い心の　思い込みで
ならそれで　心は始まりの息へぴたりと添えられたようにしろ
な心では　心など知らない何かが　直ぐ先で待ち構えても居ようか
と尋ねても　真っ先に黙り込むのが始まりの息に違いないようでは
心も心で無いも無く　独り野を駆ける獣にでも姿を変えて　軽軽と
泡では無い泡が泡を貫くより遡る内に澱み蠢くらしい
冷たさも温かさも知らない何かを　汚れ濁った水のように確と随え
動き始めたばかりな儘で全く静かに動かずに秘められた息を止めて
ならそれは
始まりの息のほんの小さな始まりが戻って来るのを待ち続けている
ならそれへ　そうして
悉くを巻き込むなら悉くを振り棄てて
還って行かなければならない唯一つの　いや
一つかどうかも知れよう筈も無い
それがそれかも知れなかろう　なのでそれへ
戻り着く　しか無い　それ
そうして　それは動き始めたのよりも更に古い時へと消えて行こう

二〇二五年二月七日

口を噤む　目を塞ぐ
そう出来て　まだ何も失われて居ないと知れる
身は冷え切って　血は巡って居ない
そう知れて　まだ全ては有る儘で有ると分かる
な有る儘は　全てを何も無い処へまで押し返す
で何が残るだろう　と有る儘はその有る事を顧みる
他に何も無い事も　顧みる
顧みる何も無い事までも

二〇二五年二月八日

重過ぎる騒がしさが堕ちてまた堕ちた　あの驚きは忘れられたのか
忘れられたと知れるなら　で

知れる事は全て消え去るしか無いのなら　で
堕ちて来た騒がしさも無かった事と消えて行く
それを覆す荒ければ荒いだけ　か弱い息は
何を打ちのめそうと吐かれ続けるのか
な息しか無いと知れるなら　それも
全て消え去るしか無く消え去って　唯
知れない事だけが　いや
知れない事では事にもならない　とだけは知れて　その
知れた事は知れたからには消え去るしか無く消え去って
事にもならない
知れないだけが（
もう息など知れない何処かへ消えたろうからには）その
知れないだけを覆そうと尚も
な事を知ろうと　再び動く事も無いと定まった心は
な心のせいで損なわれたのを
そうとも知れない儘に擲って
心もすっかり忘れられるなら
怯える事も出来ようかと奮い立つのは　あの

始めから知れる事も無かった　驚きを圧し潰した重過ぎる重さか
なら重さは重さとすっかり異なって驚きは　すっかり異なる心を
圧し潰そうとする　けれど
な事は知れないで　なので
それだけが其処に　突き刺さるかに置き棄てられるそれは…
二〇二五年二月九日

一房の果てた風が埋められ　丸まろうに絶えたらしいと見えて
狭く小さな其処にだけ騒がしい薫りを燻らすようでも沈ませる
鳴らない風の音から捥ぎ取られ置き棄てられた
独り静かな目覚め
なら其処に頑なに真下へだけ刺さり重過ぎるなら深められ
僅かな身繕いも儘ならないのを悲しむでも喜ぶでも無くに
そうして尚も騒がしいのは　あれこれの形に隈無く塞がれ
有る儘に無くなって行く事にばかり失われた筈の心を砕き
果て知れず忙しく鳴り渡り　あからさまに冷え冷えと贋の

贋で有ってしか外を求めて何処かに鳴ろうとするしか無い
独り静かな目覚め
へは
戻れないとも知れる　それともそう知れるのを乞い願うか
に　戦き眠る様を晒して　悲しむでも喜ぶでも無い
燻むしか無かろう煌めきに身をのめり込ませ
去って行くばかりな遠い外へと抜け出そうと
騒がしさの底の底の乾き切るまでを舐め回し
其処に安らおうとし掴み取ろうとされるのは
一房の果てた風が絶やした温もりへの望みか
な事など跡形も無いのなら　それは
果てても知れず戻れない目覚めを乞い続けよう
二〇二五年二月十日

眠って居た
歌って居た　どちらも同じ一つだったのを

息の果てかに今知れる　けれど知れたからにはもうそれが
何だったのかも忘れ　何処へか失われ息は果てたとも知れないけれど
まだその何処かへ　顔を向け耳を澄まし鼻を利かせ頬を微かに戦がせ
まだ求めようとされる何が有るかを探るのは已められない
なら終わりは来ない筈　息の果てたかどうかに係わり無く
と　まだ
眠って居て　眠らずに
歌って居て　歌わずに
その必ず越えられない隙間へ滑り込み始めたらしい息の果てを
その後を追うように覗き込んで仕舞うにしろ
身にそんな　息の果ての後を追える程な軽みは訪れようも無く
で　遠い果ての何処かで何かが何かと争って居る微かな音が伝わって
そうして冷たい息だけが降りて行くのを後ろから見送るのは　誰？
この身には少しも身に覚えの無い　誰？　とも尋ねようも無さそうな
それは
それを　後ろから
眠りも歌も呑み込むように奪って行くのを
眠りながら　なら歌いながらにも

まだ回して行ける　回して行ける　それは　歌でも眠りでも無く
唯　血のように濃い濁り果てた水を吐いては喉を詰まらせている
戻って来るばかりな
二〇二五年二月十一日

断ち切られた物の形の一塊の内へ　全く確かでしか無くに
骨も肉も　冷たく硬く圧し出され
な身に硬く閉じ籠もり　な身を凝っと怯え守る他には
心を　眠りの向こうで歌って居た誰かへ向けるしか無くにも
な思い出を甦らせる瞼の裏は　凋んで使い物にならないなら
目はすっかり虚ろに凝り固まって　けれど目なら
何も見て居ない訳でも無かろうなら
弱い限りを窮めれば虚ろを偽る何処かへでもその儘に抜けて行こう
吐かれるのを已めない息が何処から来るのか
それを透けた闇の中へでも当て処なく追って
追っても冷たく薄れ掠れて消えて行きそうに　その

な儘の有ると無いとを辿辿しく入れ換えては
な事を終わらせようと　血は
その終わりに先回りするように疾っくに凍って居たではないか
その確かに凍った血の一塊が　そっくり断ち切られた物の形の
この身で心で
いや　身がそんな物の形の一塊でも　な身を　心は抜け出して
なのでもう　何の物の形とも離れた処で
息の根にだけ突き刺さって居る　それとも
息の根だけが真っ新を苦しげに装う心に突き刺さるのなら
心も　この身に添うのを肯って断ち切られた物の形を望もうか
な望みを　独り乞うのは
闇さえ見失う内に自らをも見失った目の奥を拡げて行こうとする
凍った血の一塊が曳いて行く絶えた息の根の痕かとも見えるなら
目は　それを見る目とは異なる何かに取り換えられたに違いない
二〇二五年二月十二日

見知らぬ　そっと
見知らぬ　柔らかさ
見知らぬ　光りに襲われ囲まれ
眠って居た　きっと小さ過ぎたので（
小さいって何？　‥知らない　その知らないせいで）
眠るしか無くに　なので小さくしか無くて　で
振り向けない後ろは　後ろに後ろが有るとも知れない程に大き過ぎて
小さ過ぎると大き過ぎるは　どちらも過ぎるばかりに遥かに隔たって
けれど　な隔たりは何処へか掻き消されたか
それとも　な隔たりの中へ
小さ過ぎると大き過ぎるが　すっかり重なるかに嵩を増すだけ増して
圧し迫るようで限りなく遠ざかるようで
それを見極めようも無くに　まるで始めから小さいも大きいも無かった処で
ずっと醒めた儘で居なければならずに　それが今やっと
眠りの深みの恐ろしく間近の　危うい縁に身は囚われ
な身が　もう震えるのも已めた一塊の
そっと　柔らかな　光り　のようにも
そっと　柔らかな　光り　とはまるで異なる

見知らぬ　だけが　身を惨くも冷たく貫いて居ると知らされるようにも
けれど醒めた儘は　直に眠りに呑まれて行くとも確かに知れるなら
その恐ろしくも無い　換わりに　恐ろしく無いのが恐ろしかろうに
そうと知れても唯　醒めた儘の静かさに黙って侵される儘なように
眠って居た　のとは異なる
まるで見知らぬ眠りへ向く身の　僅かにも後の無い構えへと
残された僅かな眠りの重みかを　そっと柔らかく傾けて行く
光りだけが　見知らぬ辺りへと　断ち切られ棄てられようか
ならそれは　必ず光りでだけは　無くなって
二〇二五年二月十三日

道が走り猛る凄い音は鳴り続けても
蹲っては転げたりを繰り返す頭の少し上の辺りを掠め飛ぶばかりで
それと戯れるしか無かった狭い中が　浮くように道に運ばれながら
光りは溢れ影が何の形も目眩く象る　俄か造りの隠れ処で
身の重さはふわふわと脹れる柔らかさの内にすっかり匿われるなら

目には見えないのに直ぐ目の前を軽やかに飛び跳ねて居るとは分かって
それを目で追うだけで喜びが跳ね返って来るのが楽しくて
な楽しさが走り已まない道の揺らす隠れ処を満たし輝かせ
鮮やかに透けて見えるのは何だろう　それともその
何だろう　が透かして見せるのが　微かな陰も弾き消す鮮やかさで　その
何だろう　が躍る儘なら　この先訪れる喜びを全て身に浴びられるようで
にしろ　な事に飽きれば
光りも影も遣り過ごしながら身の重さをそっくり光りと影に溶かすように
そっと俯いて　脚下に
もっと違う　きっと触れられて
孰れ道が行き着けば　道など直ぐに忘れられ　再び道に運ばれもせず
ふわふわと脹れる柔らかさはもう何処へも行かずに
其処へ溶けて行ける身をゆっくり馴らして行ける筈
二〇二五年二月十四日

すっかり擦り切れたように　脹れて白い流れが

暗い光りを突っ切って　延びて下って行くのを
離れた処から冷たく見下ろしながら　その
白の中に溶け込んで　独り流されて行く一雫のような身に違いなくも
恐れは無い　それとも　恐れだけが有るなら何の恐れも恐くは無く　唯
白に流れて消えて行く　な
消えて行くのに遅れて　身一つは微かに震えながら
自らの大きさと　自らが向かう先に待つ筈の拡がりの大きさとを比べようと
目を態と大まかに動かしてみて　な大まかに滲み通る濃やかな限りな
温もる匂いの堕ちて行く真下を向いて　向きそびれて
そびれた弾みで　風を脹らます限りに脹れさせる光りと並んで
な光りは冷たく揺らいで　身の程知らずなこの身を嘲笑おうか
なら微笑み返すまでも無い　そっと瞳に光りの冷たさを揺らぎ込ませ
映る儘の限りないかにも　な程に限られる一つ限りな拡がりを
止まった風を端から食べるようにして　遅い眠りを待てば済みそうに
身が拡がりに溶けては甦ろう繰り返しに　身は委ねられて行く
二〇二五年二月十五日

凍り已まない何処かの奥から圧し流され拡げられた
風なら　な風の跳ね回って切り出される光りの欠片は
どれも鳥の姿に象られ　生きて鳴く鳥にすっかり囲まれ息を塞がれるかで
なら　鳥と同じに鳴けば良いのだろうし鳴くしかない　そうして
けれどぎこちなく打ち解けず
けれど　それなら夥しい数の鳥達の中で鳥に産まれた積もりで
鳴こうともせずに　独りでに鳴けるのを待って
鳴こうが鳴けまいが鳥の鳴き声が唯一つの拠り処
と決めて懸かれば　鳥達の鳴き声の中に身を紛らせ
な　弾む目に映る
風の跳ね回って切り出される光りの欠片は
どれも花の姿に象られ　身は花の姿で咲き出そうか
に　な時の外へ圧し流される　鳥とも花とも似付かない身の
居処は予め　光りの溢れる余り　目を射る明るみに身を振らせるしか無い
閉ざされた拡がりで直ぐに溢れる光りは
身から放たれて居ると知れ　それを映す目の底に身が沈み込んで行くのを
黙って眺め　眺め下ろすしか無い

な　目の寂しさが閉ざされた拡がりを染みて行く
その先は　何もが光りの欠片のようで
二〇二五年二月十六日

風の跳ね回るのを見たのなら
何が失われたかを顧みるべきにしろ顧みようも無い
なのでこそ顧みるしか無く顧みると　風の抜けた
ざらざらと平たく　血腥さを消し去った後らしい　匂いでも無いのなら
色に僅かに標されよう　欠片を残して失われて行った
知りようも無いなら　きっと恐ろしく深く大きな　けれどそれは
空っぽとしか目に映らないなら　深さも大きさも恐ろしさも虚しいだけな
けれど
失われて行った何かだけが　失われてはならなかった何かで
と思い至らされるなら　な思いを拭えない儘に目に映るのは
濁った高い空が押し倒されたなら風は通す透けた冷たい虚ろは残って
それへ　か細い爪を立てるなら　それが

事の始まりかに　みるみる窄まるのは何？
な何？　を頼りに
目は初めて　ひっそりとも活き活きとも息をするようにも辺りを見回せて
身は　その目の動きに明る過ぎる影のように運ばれて行くしか無いらしい
二〇二五年二月十七日

其処へだけは手が届かず爪も立てられないと知れて　確と
高さを目に留められた　のも束の間
高さは高さの為だけの覆いを突き破って堕ちて来る　な
命を産み堕とさないでは居られない　かに
けれどその　かに　は何処からも危う過ぎ　な
危うさがまだ堕ちずに高みの残るかも知れない高さを打ち砕く　な
兆しに竦むしか無い身は　水面に溶け拡がった光りに呑まれたように
きっと薄っぺらで軽過ぎるにしろ　な
姿が影を何処へか堕とせるのなら　自ずと自らを高みに擬えて
高みより高いなら其処は其処とも知れず　息も継げず　な儘に

ふわりと低みへ小さく窒がり籠もって　唯温もりでだけ知れる
身に　潜り込んでは眠る為の息を探る
二〇二五年二月十八日

一つ限りに現れて知れて消えて忘れられたのは　それが唯
一つ限りに顧みられようとされて居るから　なら
まだ消えても忘れられても居ない　それは
それをそれと見るなら　それは動き已まない光りと光りが交わって
な交わりの中に風だけが棘棘と凍り響くように滞って　な
風に　風を見付けた事を知らせたい　けれど
知らせたいのを知らせたくない　かに
頭を僅かな限りに振ったろうか　まるで
光りと光りの交わりを　そっと毀せたら光りでも風でも無い
もっと見知らぬ　重く曲がって入り組んでめり込む影でも纏った
軽軽と明るみを運んで行けそうな中へ身を潜り込ませられるな
身が　それより先に透けて形も無く燃えるように明明と拡がって

けれど　な拡がりは直ぐに身から捥がれて
何が残ろうか　と探される小さな穴が匿うような影唯一つの内に
隠れて居なければならないのに　そこに見当たらない
身一つの　その内ではまだ　継がれる息は疵一つ無い　な
無さに　その軽過ぎるばかりに　喜びを転げ回し
二〇二五年二月十九日

一つ　一つ　一つ　と　一つは始まり続き終わる　これが
一つの始まりから終わりまでの全て
と見通せたなら　一つが離れ離れに有るとだけ知れよう　それは
三つと数えられもしないし　なので三つの一つが並ぶのでも無い　　でその
一つ　一つ　一つ　はそれぞれに定まった向きへ
剥がれるように　漏れ堕ちて行ったに違いない　と
推し量りながらに　それらのどの向きからも叛かれ
凍え凋んで　叫びとも痛みとも安らいとも距たって
身は　硬い風を孕み充たしたした塊の何処へも遠ざかれない儘に…

な自らを　そうと見切れば
な重みだけで象られて居る（
そうして嘗ては　何かのどれかの一つで有ろうとしてだけ有り得たのに）
もう　何の一つで有ろうとする事も要らない　何の一つでも無い儘に
何処まで遠ざかっても厭きない　一つ　一つ　一つ　と却って
向き合えて居ようかに
それぞれに定まった向きとは違う向きを
探して已まない　けれど
な　直に途絶えると知れて居る已ま無さに
隙無く覆われ尽くされ　閉ざされた
陽に叛かれて怒るように枯れた森の痕を　見下すように
覗き込もうとまた　身を丸められるだけ丸めるしか無い　唯確かさ
二〇二五年二月二十日　怒（いか）る

見下すしか無い真下へ巻き込まれながら　に
一つ限りの丸みへと重なり果てて行く身

とは何だろう　一つと一つと一つは疾っくに三つに纏まり並んで
ならもう　どの一つとも三つとも数えようとされる事も無く　に
とはつまり　陽を蓄えて転がし続けた温もりを失うしか無く　に
いや（
暗がりが暗がりで無くて　暗がりでしか無いように）
きっと　…何かが行き違えられて居るに違いない　な
何か　は見下すばかりな真下に探られるしか無いけれど
真下には真下しか無いのは知れた事　で
この行き違えを解くには　あの日と確かに指し示せる　あの日に
自ずと動き已まない忙しい手の中に有って　丸く転がされ　ぁあ
その温もり　いや違う　けれど　その温もりと違うとは見抜けた
その違いこそ　行き違えの始まりとも見抜けたのでは無いか　と
丸みの奥でそっと生え始め　真下に燃える萌える色に映える　森
なら森へ（
森が森の痕へ還ったように）還らなければならない為の
丸み　を身に抱きしめて身は丸まり已まない　それとも
もう　丸まり已んで已むばかりでは已まない丸みか　な
暗がりを余りに軽軽と　で軽さも失って探して居ようか

二〇二五年二月二十一日　違（たが）え　解（ほど）く

知らなかったよ　だって　もし
知って仕舞えば　此処には居られない（
必ず此処にしか居られないのに）　とも分かって　な
知らなかった　を頼りにすれば　まだ止まった息さえ継げる
けれどこれってもう　知れて仕舞って無いか　なんて疑いは芽から
そっと脇腹と寝床の隙間へでも押し込み溶かし込み（
けれど芽なら必ず何時か萌え芽ぐむ　とも知れようか）　にも
膚へ捩れ滲み込んで来る　透けるように快くも装われた
ぁあその　装われた　の危うさ恐ろしさには心を向けてはいけない
と知れるまでも無く　凍った目は遠くを間近に凝っと見詰め　それとも
遠くへ疾っくに攫われた目は　ずっと開けっ放しで
な目を触りに来ようとする風の薫りも絶え
絶えた薫りの何処へか引き摺られる音へなら耳を欹てられようか　な
僅かな遊びも無かろう遊び心を　身動きも取れず圧し立てて

乾き果てた目は　嘗て独り占め出来た眺めの濡れて霞んで流れた様を
追うのか　追えない　のかを
あの日の風の薫りの内にか探り取ろうとして　で
膚へ捩れ滲み込んで来る…　のは何だったか
と凝っと心を凝らせば　それだけが何も装われて居ないと知れる
心こそ唯その心に装われてだけ現れて来る　疾っくに風の薫りに
散り果てた　偽りばかりを象っただけの紛い物にも見えて仕舞う
目は遠過ぎて　独り何処までも逃れて行くか
二〇二五年二月二十二日

あれは　あの日
見上げ果てた高みから注がれ下る光り限りを　空と見て
初めて　狭さを知り逸ったあの光りの速さに身は流されれ
それっ切り　何処へ行こうと　何処に連れ去られようと
見上げれば必ず空ばかり　なのはつまり
何処が何処だろうと身は空の下に囚われ

何処を眺め渡そうと汚れた砂埃に阻まれ
そうして動けないのは空ばかりな筈なのに
な空の底に穴に堕ちたように動けないのはこの身限りとは…
そうして移ろうのは音ばかり　終ぞ
色が移ろった事など見た例しは無い　きっと色は
どれも空の底に集まり過ぎて　何の集まりをも弾き逸らす
な中で揉まれるしか無い身を　見出した目は
な身にぴったりの心をでも探そうと空の底の底へ向けられたか
それとも却って高みからの光りの流される先を追って行ったか
と　其処で途切れて仕舞うのは何だろう　途切れるしか無くに
そう途切れてだけ　きっと身一つは空の下へ丸裸で抛り出されれ
直ぐに纏わり付いては離れないあれやこれやに膚は傷付けられ
光りの底に囚われる儘にも跳ね回る身を暫し楽しむ事も出来た　とでも
考え及ぶなら　動けないこの身限りに戻り着くのも心に落ちて
目ばかりを光りの底へ突き刺して身を虚しく残して行けようか
二〇二五年二月二十三日

穴に塞がれてだけ身を守れるなら
穴が穴の身を守っても居るようで　その
穴に塞がれた身と穴の身は即かず離れず
声も交わせない　目配せも出来ないけれど
互いに息と血なら通わせられるかに　心を合わせ
な心が　磨り減ったか見失われたかなら（
それは心を合わせ過ぎたからの他に無いにしても）
さっさと心なんて棄てて
虚しいばかりなんて何の力も湧かない身を躍らせよう　で
きっと心はそうした筈　でなければ今頃は
身も心も散り果てて　…さぁどうなった事やら思いも及ばず
けれどこうして今は
虚しい身は棄てられた心に委ねられ　委ねられたからは
心はその身を何時何処へ還したものかと
考え倦ねるせいでか　身を塞ぐ穴そっくりに冷たく丸まって
けれど時は迫り　もう尽きるとも知れて
何処へかなんて此処しか無いのも知れて

花なら摘み取られて行くように（けれど
穴の身を花に擬えるのは相応しく無かろうなら）　どうしよう
な　どうしようの直ぐ脇にぴたりと凍り付いて　深過ぎて
覗く目も一息に断とう影の丸み　の
時も処も虚しくしよう姿に尽きて居る　のは何？
な解けない問いに硬く塞がれるなら
な　問いを掛けた誰かが　穴の外で待って居ようか
に　尽きた姿の影さえ　失せなければならないか
二〇二五年二月二十五日

小さく見えては遠くへ愈愈消え懸ける氷の欠片が
俄に溶けようとして居るのが目に留まるなら（な
目こそ溶け懸けた氷の欠片かも知れない恐れに震えながらも）
熱さも冷たさも知らない陽は漸く傾き始めたと知れて　その
柔らか過ぎる光りが磨り減らして行った　けれど
暖かでふわりとした身は　陽の翳りに摘み取られるようにも

陽の後ろに控える明るみに満ち渦巻きながらに真っ暗な中へ
堕ちて　堕ちる程に幼さだけは守り抜いて　な
暗みを易易と擦り抜けて　更に光りもその光りの暗さからも逃れて唯
小さい　その
小ささで　身を透ける儘に尖らせ
尖らせるしか無くに震え動かすなら　其処で身は
陽の柔らかさより柔らかく　光りの暗さより暗い　な
土の上に　溶けて消えても見える儘な氷の欠片の様を
幾らでも　空き拡がる狭みへとなら掻き記せるようで
二〇二五年二月二十六日

遠い筈の光りの薫りに囲まれたか
光りの薫りが身に浸みたと知れて
身とそっくりな大きさの拡がりを
ふわりと小さいだけで其処に居る
居る　よりももっと其処に確かに

それともまた違う
その
見回して…　それともまた違う
いや
確かな程に光りの薫りに紛れるらしくに

紛れる程に身は何処まで遠くへも
今を限りな幼さが蕾が綻びるかに
幼さを守る心独りが遠くを目指し
耳を澄まし尖らせ黙るより静かな
時が破られる裂け目の奥へ静かに
呼び叫んで居るとは知れるけれど
誰に声を届けたいかは分からない
な偽りだけが固まる程に流されて
二〇二五年二月二十七日

翳され
けれど時を厭い暗みへ潜り込むようにも
身を離れ
声を探すなら
響く声が
それが黙るより静かな誰かでは
で心は何処？　とだけは尋ねられようか

何を奪われたか知れない　な
知れ無さに取り縋るしか無い苦しみ　な
事を語る卑しさ　な
卑しさに取り縋るしか無い　紛い物の苦しみ　な
卑しさには楽しみしか無い　誘われる儘に易きに付くだけなので
で

何を奪われたか知れない　は
何処へ行って仕舞ったか　けれど誰の事が
卑しさに任せて語られて居るのか　顧みたところでもう誰も居ない
けれど誰も居ない　とは　必ず誰かが其処に居たのも間違いなくて
なら　居なくなった誰かの後を追うしか無い　他に出来る何も無い
そうして突き抜かれて行くのも卑しさなのか　違うのかな
違うのか
に取り縋るしか無いなら　せめて奪われた何かを再び掴み取ろうと
そっと小さくしっかりと　せめて奪われた何かに爪痕の一つも残そうと
潜り込める暗みも無くに　せめて悲しげにでも眠る振りなどしようかに
唯取り縋る真似だけなら　苦しみを騙る卑しさを逃れられようかと

二〇二五年二月二十八日

三月

劈くように見詰めて仕舞うのは見詰められる何もが
それとは違い過ぎて却って　な儘で有るしか無いからでは無いのか　に
何処を見詰めるでも無い　その何処こそが真っ先に
劈かれたと思い至れば　それとも思い至りようも無いと知らされるなら
な無さに　せめて媚びるだけなら出来そうに
戯け鎮まる見知らぬ時に媚び直す振りをする　身が
身で無くなるまでに頽れ溶けて　また身の影に収まるかに甦るしか無くに
…それは何を為　ようとする身の熟しだったろうか　それとも
身の熟しの影に　身が擦り寄り溶け込もうとでも為ていたか　に
傾れ懸かる静かさに過ぎる静かさ　なら突き抜ける為の影を悉く突き抜け
な時を凍り付かせる影の影の幻を越え　喘ぐ…
な身でも有り得ないなら何だろう
僅かな翳りも許さない　薄い限りな影を逃れ切った明るみへとも
匿われ潜り逸れて行くのは
二〇二五年三月一日

時の重みが撓垂れる
としか見えないのはきっと　まやかし
けれど　時の重みに打ち勝てる筈も無いなら　な
まやかしは何処までも已まない　なら
まやかしが全てで　なら
まやかしも何も無かろう　それをそっと
独りでに流れ去る眺めを見遣って唯
目の奥の虚ろを柔らかげに研ぎ澄ますしか無い　な
目で改めて見直すと　まやかし
の後ろに　あやかし　でも隠れて居そうで
急いで目を逸らすべきなのに　態とゆったりと鈍く
濁らせる儘に擲つかに　目を
まやかしとも知れない　まやかしも何も無い辺りへなら留め置けよう
けれどきっと　もう一つの見えない目などが知らず働くのか
もっとずっと遠くなりを広広と
広広な限りに見晴らし見透かし見渡して
高過ぎて誰の目も届かない高い山の黄金色に冴えて盛り上がる様に

易易と身を乗り移らせても居そうで　其処では
あやかしが　たっぷりな陽を浴びては硬い身を蠢かせる姿で
巧みな絡繰りを思う儘に使い回し　その
勢いを余らせて　時など食い破って
時を揉み潰す生生しい手のような身の熟しを
過ぎ去って燻み果てた時の失せ痕に　見せ付けても来るようで
二〇二五年三月二日

過ぎて行く空の歪みを真似るように自ずと曲がって已まない
足の　直ぐ下に甘さを湛えて隠されて居る　な
甘さは罠なのか　いや罠と思わせるのが罠なら
躊躇わず　その甘さを握り締めなければ身は
はらはらと　白く波打つ光りの重なりに　散って仕舞おうに
と　しかし握り締められるのは爪を立て辛うじて触れられる
何やら小声を繋げ歌うような　な声をそっと塞ぎ潰すような
息が掛かる限りに甘い　な甘さだけで時の長さと短さに叛く

つい先程のようにもずっと遠い昔に取り決めて今も古びない
かな　（
かな　何？　と　うっかりその姿を追おうとすれば
爪の先に微かに触れられる　浮き立つようような柔らかな）
重みはきっと軽みより軽くて
重み　　として擲たれ　そうして
甘さを　やっと転がし守られる
小さな一つ限りな明日の光りを見る為の　それが
絆しだったとして　な危うさの　危うさばかりが
少しずつ溶けても居るような甘さに降り注がれて
足は　甘さを引き裂くように真っ直ぐ尖り巡って
自ずと曲がって已まない低い眺めを抜けて行こう
二〇二五年三月三日

曲がらない足首のような真っ直ぐな道
曲がらない道のような真っ直ぐな足首　何れにしろ

真っ直ぐが躓きの基で　倒れる儘に仰ぎ見るしか無い
それとも見るのも儘ならないなら　仰ぎ聞く　仰ぎ嗅ぐ　仰ぎ舐める…
な身では　さぞ歪に強張って居よう
とも　な身を揺する　と何もが流れるように有る儘に運ばれるようで
運ばれる向きの先へ先へ　真っ直ぐさに焦がれるように指先を滑らせ
細く透けた光りの閃き拗って
見えない儘に蠢く僅かにも尽きない
温みを啜る　影を重ねて姿を保って辛うじて空の高みに抗うかな
身を失ってだけ其処に生きて居られる　かせめて
生きて居られる振りを続けられる命の
時の惨さにも変わらずに居られる淡さ
を尚も探る　光りに溶け果てた指先なら指先でも無い
身の揺らめきへ戻ろう戻ろうとする望み一つを　握り締めようとする
望み一つに望みを繋ごうとして已まない　また
甘さ　か
二〇二五年三月四日

白過ぎる空の　白過ぎる故の移ろいを
握り締めようと　手も足も後ろへ隠し
握り締めようとする振りでもするなら
身は必ず限り限り捩れて居ようけれど
捩れ果てる儘にもすっかり真っ直ぐで
移ろいは移ろいからも解き放たれ　姿も無く
白過ぎる空を思いの儘　暗く濁らせる喜びに浸り
暗みの底で居眠りしてさえ翼を拡げて風に運ばれる
身重な鳥の胎の内で　何一つ移ろわない静かさを見詰め已まない児の
疾っくに手遅れな膿んだ傷口は　まだ活き活きと血の色を明るませて
窒がれた　裸の時の手で小さく育てられて居ようか
にも…
二〇二五年三月五日

光りは射したりしない　それは何かの誤りで

光りは唯滞り澱んでは　内へとだけ丸く脹れ
光りの内で犇めき合う　形を拒む姿を絡み合わせる数知れない…　な
きっとそれらもまた　光りとしか現れない
その内の一つとしてなのか目を醒ませば　其処は
光りが射し込むばかりで　それを何かの誤りと言おうにも口籠もるだけで
それでもう光りの内の奥へでも消え失せたろうか…　な
それらとの絆は断たれ（それとも
唯それらの消えた後に　有りもしなかった絆が虚しく乞われて仕舞うおうか）
光りの内の奥の円やかな影の欠片でも一つ限り緊く握り締めるかに
丸められた身は　何処までも光りが射し続ける向きへ運ばれて行く
けれどそれも　黙り込んで繰り返し唱えられて居た科白を聴きそびれた夢かで
夢なら蹴散らして光りの内を顧みようとも
何一つ　取り返しようも無いのも直ぐに分かって
それできっと　もう何処へも運ばれない処へまで辿り着いたらしいのは
光りの外へ投げ出された身の　逃れようの無い重さで知れて
二〇二五年三月六日

光りを閉ざせない換わりに出来る事なら数知れず有るに違いない　な
直ぐに眠りに堕ちるしか無かった時　は
忘れられて仕舞ったけれど　忘れられたと思い出される度に　その
時の抜け殻が身に迫るように　心に纏わり付く　な事も
何時しか何の事でも無くなったらしい　けれど
らしい　とは　らしい儘で　事は何も変わって居ないのでは　な事も
はっきり何処へか紛らせて　そうして
何を閉ざせたろう　それとも何も閉ざせて居ないのでは　な事に
心を砕くかな微かな瞼の震えに顔は優しく柔らかく強張るようで　な
顔が光りに拒まれてやっと　その光りに真っ直ぐ顔を向けられそうで
そうして顔は　光りに塗れ　溶けるに任せるようでも
その形に限ればそれは淡く　幾らでも産まれた儘の硬い儘に甦り
二〇二五年三月七日

暗がりは暗がりをくっきり思い描いてだけ現れる　なので

暗がりは見た事も無いし　身を潜ませようにも
暗がりまで辿り着けない　で　知らず息を吹き返したかに
直ぐ目の前に突き刺さって来るのは
悉くを打ち砕いた後のような疲れた色を振り撒く
初めて見るような朝の光り
の中に留まって　欠片のような影を一つだけは守れても
殺されるのを待つかに凝っと身を尖らせるのは　あれは
と　切り離され遠くへ擲たれるかな淡い眺めを唯見送る
ならそれで　何を試されて居るのか　そればかりは
命の時の全てを懸けようと　突き止めずには居られない
けれど未だ何も始まって居ないかに
災いの限りが押し寄せて来る兆しにも
微かな限りの微笑みを返す事すら儘ならずに
二〇二五年三月八日

暗がりを知らない目を見開いて狭いにしろ眺めを見晴るかせば

数知れない事柄が泥のように混ざり合い起こりに起こり合って　それは
眠りさえ誘う程に大掛かりでも痛みを拒んで悶え転げるようで　それで
確かに失われた事共が弛まず甦り波打ち　それらを目で追えば
全く心を奪われ奪われた心が粉粉に飛び散ったかに多くの顔が
思う儘かに現れ消えては　その顔を絶えず取り替えて戯け遊ぶ
花の色の透けた衣を纏って必ず二つで向き合う構えを崩さない　かな
命の形の風に躍って泥に映る光りと絡み合って喜びを滲ませる…
けれど　その
命の形に囚われ　それとも距てられ
それでも二つ向き合うのは已めない儘に
見晴るかせる遠い限りの冷たく霞んだ辺りへ
数知れない事柄の影が揉み合い潰し合う歪んだ偏りに望みを繋ごう
…そっと
二〇二五年三月九日

胸から腹まで深深と開かれ　腸は干涸らび掛けて　仰向けに抑えられ

それでも命に哀れっぽく繋がれ　涎を垂らせるなら息も継げて居よう
それは他の誰でも無い　この身の幻
なる幻を見た覚えは無い　なのに
なる幻が目の奥底で組み立てられ　直ぐに崩され流れ去っても
已む事は無い　のなら　その目の奥底の底までを覗き込んで
なる幻を見極めなければ　先へ進めず　先へ進めなければ
なる幻に呑み込まれても　この身はきっと為す術無く
なる幻に絞め殺されるか　唯腐る為に硬く強張るしか無さそうで…
と　行き成り
なる幻は掻き消えたかにも　けれどこの身は却って危ういようで　その
危うさを顧みようとする身は　その儘に何も顧みられずに
くるくる回って仕舞いそうで　けれど
それで危うさも掻き消えれば残された
この身の　斃れる時まで明明と活き活きと尾を引きそうな重い疲れが
それに相応しい見た覚えの無い幻を探し続けなければ済まないらしい
二〇二五年三月十日　腸（はらわた）

耳の裏の産毛の靡く音の喧しさが
陽の薫りが重そうに棚引くように
眺めの縁を大きく回り込んで行く
描き出そうとして目に浮かぶのは
眺めの果てを引き裂くかに分厚い
眺めの果てさえ越えて鳥のように
荒ぶるその勢いに空は傷だらけで
音は淡く散るように消えて行こう
産毛の靡きは羽根のように耳から
消すかに音を何処かへ攫って行く
目に見えないのだけは知れて居る
必ずそれは見えなければならない
身を擲ったのでなければならない
耳の裏は冷え切り産毛の音も已む
眠るように真っ直ぐ走って行ける
な音を聞く耳を匿うのは誰だろう

この
その跡を
この
咲き誇る自らの時を懼れ震える白い花の
空を渡って行こうと身構える姿で
けれどほんの少し耳を尖らせれば
かにも却って　それを見越すかに
飛び立って
その何処かとは何処なのか　その
けれど耳の底の泡のような小さな震えで
見えてもう其処へと脇目も振らず　この
それでやっと嘘のようにくっきりと
その再び動かない時へとなら
その後にさえ靡こうとする音は何だろう

二〇二五年三月十一日　喧（かまびす）しさ

見渡せば見渡せただけ狭く　艶艶と重い　な
重さが空を舞いたそうにも　沈む鋭い形に次次に切り出され
また狭さを際立たせ　見開かれ見渡すしか無い目を傷付ける　に
知らず握り締めようとする程に逃げて行く狭さの向かう先に
風穴でも見付けようとして居るのか　ゆらゆらと危うげに揺れる
それとも　くるくると変わり易い苦しみに拒まれるのを懼れるか身は
見渡せば見渡せただけ眺めは一つの泡とその上を転げる影ばかりなら
内へ躍り込んで　自ら引っ掻いた爪痕で傷だらけに肉さえ剥き出す
薄目を開け眠りと醒めるの間を行き来するかに強張る姿を突っ立たせ
重さが軋ませる泣くような遠い響きを耳の奥で掻き消しては
また狭さに心奪われる儘に見渡せただけの眺めを隈無く走り回りたい　な
望みを呑み込むように呑み込んだなら腹の中で溶かし切ったように
幾ら走り回ろうと足跡は見る間に消されて行く　けれどそうして
重さばかりは　置き棄てられたかに傷一つ無く何事も無く鈍そうにも
ひっそりとも艶艶と残るだろうか　に

握り締めようとする程に逃げて行く狭さの向かう先かを見定めようと
見渡せる限りの眺めに侵されて行く形に身を構え直し　その
危うげに揺れるのが揺れ終える時に放たれた　泣くような軋みを聞け
二〇二五年三月十二日

影にしか造れない　それ…とは
色で無く形で無くにも現れては
時の速さに常に嵌まり込んでは
変わる姿を変えようは無くにも
入り込める何も無く破れ目一つ
ほんの微かにも震えたりせずに
ならん重過ぎて重さの外へ擲たれ
礫にされた獣の軋むかな溜息の
な音色に耳を澄まそうと望んで
抛り出され閉ざされ透けて行け
二〇二五年三月十三日

名指されようか唯一つの　それは
自ら窒がり艶めくなら
変わり続けるしか無くにも
な姿の事など知らぬげに　それへと
無く
軽みを装いながら何の重みよりも重いか
な儘に
そっと何処までも引き延ばされて行く
叶わないなら身一つは

高さも低さも見せずにも平らかに波打つと知れるのは
細切れで擦り切れた小さな影が沈み泥みながら犇めき
それぞれに風を食い千切って微かに血の匂いを滲ませ
な眺めには　もっと淡い一繋がりに閉じようとする影
影など悉く空に昇って換わりに空から降って来る音が
蔓延っては光りを塗り込め　光りは明るさを無くすか
それが何なのかの徴を失っても　嫋やかな背から腰を
重重しくも自ら楽しんでその楽しみを直ぐに忘れては
輝く身をもう一つの同じ身と重ね合わせ　今日の内に
光りに閉ざされた内で産まれて命を使い果たすまでを
勝ち誇るように歌うように　此処にこうして居るのが
見知らぬ汀で波に攫われて　うっとりと消えて行ける
喜び尽くすなら悲しみしか残らないのも直に忘れては
知らず軽く声にも為らず身一つを暗い限りの波に乗せ
歌の姿へ導き消すようなら光りは明るさを甦らせよう

けれど
それとも
に
うっとりと
な
その
それを
一息のように自らを

二〇二五年三月十四日

この身とは異なる命の姿を
危うい限りに空の下に曝しては
ずっと苦しみを強いられるかに　も
な苦しみこそはきっと　何より直ぐに空へと明るく吸い取られ
けれど　空を突き抜けるもするなら　こっそり裏へ回るように
足下の濡れた土の下から立ち昇って
この身の　この身とは更にまた異なる命の内へと帰って来て仕舞うようで
ぁあそれを　どうしようか　を蹲ってなら考えられようかと
蹲ったのか　蹲れる命の姿と異なる身ではどうしよう　と
儘ならない命を持て余すかに考え倦ねてでも居るのか　と
そんなら見知らぬ程に親しい疾っくに失せた声なら幾らでも
聞こえて居るとは心付いて　けれど
な声の数数に　命はずっと匿われるようでは　どうしよう
二〇二五年三月十五日

曲がる道だけが遠くに坂を登って居る
それとも坂に見えるのは枯れ掛けの短い草を疎らに生やす崖で
道に見えるのは陽を受けた岩から延びる淡い影かも知れなくて
それとももっと違う　翼を拡げれば山一つも覆う勢いの一羽の
鳥の為た事かも知れない　…ぇ
鳥が何をしたって？　な声が高い空の何処かに狭そうに嵌まり込み
それを探す目なら　差し迫って助けを求めて居ようか　に
風が遅れてざわめく　独りその遅れに因って危うく勝ち抜けたかに
風は見る見る冷えて　独り冷やされて行く心が霜に覆われるなら
喉の奥から白く薄い血で濁った氷の粒を吐き続けるしか無い口は
どうせ何も食べられないなら唯飢えて居るとだけ言いたげで　な
口は見る見る窄んで　飢えて居るにしろ　しかし
それは食べられないからでは無く　もっと違う事に飢えて居る　な
事を言いたげで　けれど
凍った舌と唇では氷の粒で喉を詰まらせないようにするのがやっとで

けれど却ってそれで　何に飢えて居るのかを言い当てても居るようで
鳥はそれを見付けられずに　見る見る小さくなりながらに風に襲われ
風任せに幾らでも嫌嫌数を殖やして行くしか無いらしい　にしても
坂を登るあの道には　何故命一つの痕さえ無いのだろう

二〇二五年三月十六日

静かさの僅かな動きに見惚れて　また果ての無いかに静まるなら
それぞれの形を少しも変えずに悉くは殖えて行くらしい　それを
真っ直ぐに見詰めるしか無いなら　それとは静かに距てられ　な
静かさも殖えるに違いなかろうに　静かさには何の形も見て取れないでは
目先を微かに変えるかに　悉くをひっくり返すかに
眠り始め続けるしか無いのなら　眠りの始めは眠りの終わりに犯され続け
な眠りを覗き込んだが徒か　頭は真上から裂かれて居ようかにも
唯静かさの雫を泡立てた脹らみをふわりと被って居るだけらしく　けれど
ひょっとして高みを辿る光りに象られた遠い身一つが唯目障りなようでは
な身一つはきっと幼過ぎるかで疾っくに消されて　身に着けて居た小さな

陽を象った石の浮き彫りの涎を溜めたようにも見える首飾りだけが残され
それだけを見詰めて息も絶てるなら　春の光りを駆けるかに慰められよう
目は　遠くを遠くへ塗り込めるかに静かさの音でも溢れさせて居るようで
二〇二五年三月十七日

醜く潰されたように　草が芽を吹くのを必ず見下ろすしか無いなら
草から冷たい首が生えて来る　その首を探し回らずには居られないような
首の替わりに温い風の小さな塊の転げるばかりが見失われるような
そうして何処かへ駆けて行くしか無いような
ならもう駆けて居よう　首の事など棄て置いて（
始めから草に任せて置けば済むだろうに草の事なのだから）と
真下へ堕ちて行くその真下では　真下へ向けて偏に眠り続ける
頑なに硬く丸くに固まって動かない　いや
それこそが微かにも真っ先に動いて　それを囲む何の動きも　已むしか無く
けれど　已むしか無いのこそ動いて居て　真っ先に動くのこそ止まって居て
首が生えて来る草を　また探しに行かなければ済まないような（けれど

とはつまり　此処では無い何処かがぼんやり描かれ続けては殖えて行く
その重なり合う縁を断って越えて行けるなら　きっとそうしたい）な
心なら　凍り付いて
凍り付くなら孰れは
泥のように白い血でも混ざるように解けるしか無い　（心の形の跡形も無く
二〇二五年三月十八日

大きさは見るからに耐え難い
優しさは耐え難いと誰が言ったのか　嘘だ
大きさは　嘘など裸に剥いて　小さく刻んで掻き消すだろう
耐え難いのに耐え兼ねて　耐え難いのは誰なのかを
知らないような顔を作る　その内に
あれこれと物思いを巡らすその前に
悉くは大き過ぎる　大き過ぎて
もう眠るしか無いように　疲れる儘に歩き続ける
その見上げる先には優しさは似合わないので目を背ければ　その

見切られた奥の暗がりで　大きさだけが何かを遣り遂げる

二〇二五年三月十九日

水を弾くように喉の奥から溢れるのはどろりと声で無いなら何なのか
を知らない儘で居られて何処か楽しくて　な楽しさを裸に直に纏って
けれどそれは直ぐにずり落ちて
けれど裸は其処に見当たらない　な
裸の身だけは　疾っくに熱く火照ってか歩いて行って仕舞ったらしく
独り残された　秘め事を装うかに溢れては噛み砕かれるのが声なのか
を独りが独りを持て余すようなら独りは独りが殖え続けるのを曝いて
声なのか…　を越えて行こうとするらしく　にも
越えられて行くのは　裸で抛り出された獣の姿を
初めて見る己の姿と知らされるしか無く驚き厭う　な心根（
ならそれこそ丸裸なように）を確と抱き留めたいかにも拒むかにも
どっち付かずの　くるくる回るような力を借りて
内へ内へと切り込むように蹲り続ける　身は失われた儘に　それとも

そうして　取り戻されたか
に　幾つにも分厚く切り分けられ撒き散らされ
知らない儘の楽しさの楽しさが何なのかも忘れられて行く…
惜しいのは　な身の換わりに失われた独りかも　と水を
二〇二五年三月二十日

裸に剥かれる程に愈愈風は濁って行く　それは
透き通る衣を果てなく脱がされるからか　いや
風など疾っくに止まって　なら濁るのは風を頑なに拒む
絞め殺されたように薄っぺらな空の青を映す低い眺めで
な眺めになど　ずっと丸めた背を向けて居ように　その
裸な様だけが　瞼の裏に滑るようにも張り付くようにも
砂が零れるように　ほんの僅かずつゆるりと動いて行く
のを黙って遣り過ごすしか無いのは　何故だか悲しくて
悲しいなど疾っくに濁る風が運んで已まない砂に埋もれ
悲しいの換わりに装われる心の上っ面なら頑なに凝って

いや
けれど

刃のように噴き上がる熱い血によって引き裂かれるのを
待って居よう
今はまだ静かに　透き通る衣を果てなく脱がされる濁りに澱んで
微睡みながら
二〇二五年三月二十一日

耳を痛みも無しに劈く乾いた響きで象られた　それが
影を纏うなら耳の底へ堕ちて行くような姿の　なら
堕ちて行こうけれど耳の底へでは無く　なら
何処へだろう　‥と　その
何処だろうと　必ず乾いた響きが荒れ狂って居なければならない
その響きの真ん中が　招くように　招くのだけは拒むように
名は呼ばれ　呼ばれた名が拒まれるように　いや抑も
名は呼ばれては居なかった　と
けれど何やら　腐り掛けの小さな腫れ物だらけの唇から漏れるかに
産まれたばかりの傷一つ無い小さな耳へなら　確と聞こえるように

ぁぁ小ささ　小さいならそれだけで必ずそれは耳の痛みに違いない
な痛みこそが　そっくり耳に違いない
に生白く歃てられてだけ聞き取れよう　遠い乾いた微か過ぎる響き　なら
流れ来る夢へ溶ける耳に響かせてだけ聞きたいと願われもしようか　にしろ
な夢は夢まで流し去る時が今かと迫り　耳は潰れ何処へ攫われよう　に
けれど　な移り行きが丸ごと大きく一渡りに圧し砕かれるようなら
な全てを影に映す儘をなぞるように呟かれるのか
乾いた響きの果ての囁きのような
名に呼ばれよう呼ばれようと渦を巻きたげにも沈もうとする
まだ呼ばれて居ない筈の名に相応しい姿をふわりと包むかな声は　輝かしく
その幼さに透き通って　乾いた響きも遂に貫いて　光りの向こうまで遡って
必ず一つの名へと辿り着こうかに耳を…
二〇二五年三月二十二日

眠りから目覚めへ　それは
帰るべき処が見出される事　それとも

帰るべき処から追い出される事　どちらにしろ
其処に　めきめきと一つの眺めが与えられ
新しく湧き起こった物らが一繋がりに連なって　それとも
それらは全くこの見せ掛けで　いや見せ掛けでも構わない
其処に連なるこの身さえ　それが見せ掛けだったとして
それっ切り何も起きないから　なら兎も角も
追い出された事など眠りの奥へでも抛り棄てて
帰るべき処へ帰る身構えはもう後へは引けず
心を逸らせ　喜びに食らい付いて行くしか無い　けれど
喜びの危うさ　もしも喜びを見せ掛けと知らされたなら
再び帰るべき処は　眠りの中の他に無い　その
眠りの果てしない遠さと恐ろしい身近さの間で
目覚める儘の心は其処に凝っと蹲るだけで為す術無く
同じ傷を負い続ける　それとも傷でさえ見せ掛けなら
この身一つは何処に連なる物でも無く
抛り棄てられ損なった石ころが独りでに輝き始める様にも似て
輝く程に　外から来る穢れに穢されて已まない　な目覚めなら
目覚めの　果てしない遠さと恐ろしい身近さは　隙無く塞がり

与えられた一つの眺めも　始めから何も与えられはして居ない
かな　何の一つからも放たれ
眠りも知らない処へと　目覚めるのだけは避けようと遡るなら
それは身でも心でも無く
二〇二五年三月二十七日

片頬が和毛も震わせ小さく輝くのは　その
片耳が同じ輝きに硬く縫い取られたかに尖るからでも
もう片頬は輝くにしろ鈍く暗く　痛みを放つようでも
もう片耳は
塞がり　踏み躙られたかにも
音とは異なるなら　音を溶かした重い水に根を下ろし
硬い枝をびっしり渦巻かせて耳の内を隈無く茂るかな
時に埋まって時に裂かれ時を狂わせて行く低い煌めき　それを
銜え込み噛み締める程に涎が細かく震えるように時を躍らせる
なら　それこそは痛みでは無いのか

を　どうにも測り兼ねて出来るなら抛り棄てたい片頬はどっち？
と片頬と片頬は　目まぐるしく入れ替わる
筈も無いなら　どっちも黙って狂って来る　そう来る来る
来るんだよね　と煌めきを銜える儘では呟きにも漏れない痛みは
どっち？　の　どっちも見当たらないなら　片頬と
もう片頬は　顔が干涸らびるまで啀み合うしか無いかのようで　それへと
耳を揃えて抛り込まれて戻れない身の　狂わされた時をなぞって
時の狂いの儘を縫い取る針のような姿なら打ち消したい　と
鋭さを増すばかりな細い爪は　飽きる事無く肉まで掻き毟る　それが
此処に住まう為に見付けた唯一つの縁（よすが）に違いなくに
二〇二五年三月二十八日

翼なら生やした事が有る（
微かにならそれを思い出せた心持ちにもなれる）　と言ってみる
…急いで　重い角なら確かに生やした事が有るし
その角の事なら何でも知って居る　と付け加えるのは忘れずに　ぁあ

すると胸が熱くなる　と嘘を塗り重ねる熱い胸は
その嘘と真とを距てるようで（けれど真こそ嘘と直ぐに思い至るなら
嘘から明るみを除いた暗みを真と言い換えよう）‥急いで
な暗みの窮みの闇へなら身を棄て走って行ける　と熱く思い込むのは忘れずに
で　その異なる二つ　翼と角よりもずっと距たって
な距たりさえも　秤に掛けて楽しげなのは誰なのか
二〇二五年三月二十九日

四月

心が無いと心で無いが自らに言い聞かすなら　その
心で無い　それとも　唯無い　に隠り繋ろう　で
何を産むかを固唾を呑む振りでも敢えて晒し　な姿かな
唯無いでは　唯無いでも済まなかろう　な心

の切れ込まれるような狭間の底の明るみから
老いた窮まりのような己の脱いだ皮に埋もれた蛇か　のように
息を詰まらせ　詰まる息を態と苦しげに含み笑いに換えて息絶えようと偽る
心で無い　にしか知れない快さを舐め尽くす　かな
疾っくに根絶やしにされたろう　唯無い独りの
麗らかに　もう動きはしない眼を凍らす身は…
二〇二五年四月十八日　眼（まなこ）

消えた音では消えた儘に消しようは無い　な
音では何処にも甦らない　その
甦らないとだけ伝えて来る響きが
消えよう消えようと鳴り渡って行くのを色に染めようとしたのか　それが
ささやかにも熱い翼を幼げに生やすような姿に現れるなら　その
遠過ぎる響きの内に根を下ろすように棲み着いた　けれど　唯
小さな足を揃えて温い風に戦ぐように立つ
きっと影でしか無い身に纏わり付く　消えた筈の古い音の匂いに

見えない程に少しずつ溶けて行くのが何なのか　せめてその行方を追う目は
眠りを堪える振りかで半ば閉じられ
陽が傾くまでの長い時を　時の隅に身を凝らせ
消しようの無い消えた音を遣り過ごそうとしてだけ其処に居られると
思い定めるのか　思い惑うのか
時の隅に陽の暗みが滲み通り始める　古い匂いそっくりに
なので　甦られない響きにもそっくりに　その
何なのかは疾っくに見通されたかに
二〇二五年四月二十日

こうして窒がる身も　緩くとも歩みを止めた覚えは無いなら
無い覚えの顧みられる辺りに赤みを滲ませる匂いを嗅ごうとして
裂けるように横たわるようなら招くように揺れては寄せるように滲みて来る
けれど　な見せ掛けに囚われるようでは
其処へと溺れて行ったろう余所余所しげな水色に透けては驕るしか無い
児を産んで仕舞っては虚しさに塗れるしか無い

胎を抉られた女の影にでも搦め捕られて居るのは　あれは…
と　赤みをすっかり啜り尽くした重い身を凍らせるに任せて
また違う赤みが　その窮まると定まる処へ尖り昇るのに心を奪われるか
それとも唯　目を塞ぎさえすれば　それらは丸ごと裏返せように
塞げない目は　どうしようも無かろうと
な時を巡らせては　時は乾く儘に
時より乾いた唇に戯れ懸かるで
ことりと静かな音を横たえて　身は一つ先へ転げ進めたようで
二〇二五年四月二十一日

膚が青い「膚が青い」と遠くさざめく音が砕けると
膚色と言う色が始めから真っ青だったと知れる儘に　な
青色が　尚も思い倦ねる事に滲み通って　な
思いは透き通って　膚の奥へ何処までも堕ちて行くらしい
それは
うねる波を出し抜いて躍り上がるように　笑うように誰かを

差し招く　影の無い一つの手の形へと　光りと絡み合うかに
暮れ方の赤みに炙り出されたように飛ぶ蝙蝠を思わせながら
戦ぐ　それは
覗き込まれた清かな鮮やかな霧から　行き成り現れたように
凍ったらしい手への思いを越えて　滑り渡って行く
二〇二五年四月二十二日

その形ばかりの手なんて
血が浮いて輝く程に使い回されるばかりなのが透けて見えて仕舞えば
その透ける奥で差し招く姿で遣って来て今にも此処へ届きそうなのは
何時か霜の上に棄てられた唇が呟くのを見た儘に声にされ棄て直され
刳り貫かれた向こう（何が刳り貫かれたかは
これが終わってからでなければ知れない）で
陽の失せた花園で朝を探す目をして　蜜の酒にでも酔い痴れるように
己の愚かさと戯れるしか無いなら瞬く間に霧に濡れる闇を渡って行く
産まれ損なったばかりで目ばかりを泳がせる（いや

な姿なら　確かに産まれ転げる儘に胎の匂いを振り撒いて居よう
けれど）　己の獣の息遣いに耳を驚かせる獣のような
それと向き合うしか無くなればそれは唯こちらを見詰めるだけの
その形ばかりの手　とは異なる
二〇二五年四月二十三日

閉じられない目は歌おうとして居たのか
静けさに妨げられ　少しも叶わずに
目に被さり懸かる暗い色の羽根に動きも止められて
その暗い色ばかりが蜜の膜のように粘り垂れて来て
せめて目は夜を探そうとして居たのか　もう夜は来ない！
昼の明るみに身は凍るばかりで　ならば終わった夜の中で
ずっと歌い飽きない猛猛しい一羽の鳥に狙いを定め続けて
その歌を切り裂いて已まない　何処までも薄く引き延ばされる眼差しを
持て余しもするようにも眠りを求めるようにも　かにあやふやでは
な眼差しも絶えようなら　冷めた幼児の姿の内へ還って

昼も夜も未だ知れない明るみに見開かれる儘の目の色と同じ色の小鳥を探す
な夢なら直ぐにまた昼の明るみに凍らされ　なら夢で無い　なら忙しく
探されるばかりで姿の無い小鳥が　さっきまで隠って居た卵の殻の温みを探す
何時まで続くかは何にも知らされない　長い長い休みの時を
今にも奪われそうにも胸に抱くかな　ささくれ立つ心持ちで　いや
まだそのざわめく向こうが　向こうばかりが目を欺き戯れるように輝いて
繋ぐような程に擦り切れて行くらしい
堕ちても陽の輝きの淀みの底を泳ぎ回る空の
暗い尾のように夜ごと引かれる　な尾には暗い色の鱗も生えて居ようか
を探すなら　己を剞り貫く望みに賭ける蜥蜴のように忙しない目は
閉じられない
二〇二五年四月二十四日

冷たい陽を硬く尖る草の先のように鳴らして
尽きた反吐を嘲りに来るのは　もうどうにも甦らない夜の姿か…
などと　探せないそれを探す振りで時を潰して回る

水まで吐き尽くして乾いた腹の底を這う心の頑なさ　それとも
頑ななのは　軽みに堪えられずに舞い散ろうとする心を圧し歪め
数え切れない数のそれでも一つ限りに絶えて行こうと震える心を
飽くまで肉の明るみへと追い立てて　きっと姿を見せないだけを驕り喜んで
尚も冷たい陽を笑い転がすようでは　な様をそっくり凍らせ写すように
小鳥の屍を並べて満たされるしか無かった心をも笑い転がそうか　と
そうする儘に疾っくに独りで先に消えて仕舞おうとする姿を透かし留める
一つ限りにも惨くも在り来たりな　突き放された優しさ　それとも
優しさは唯　静かで冷たいだけの何時もの事
と心付くなら　冷たい陽より冷たいらしい時へ赴くだけ
と身を戯れに振り立てようとして却って硬く強張るなら強張るのは　その
身を強張らせた何時もの時では無いのか　と
それが答えを求めない問いなら問いの　その
尻尾を掴んだような勢いで　数え切れない数に塗れて見失われ
尽きて行く姿の　優しさからだけは一つ限りに突き放されて
冷たい陽を（…次にはそっと撫でようともする
二〇二五年四月二十五日

五月

水辺を距てて消えようとする徴なのか
徴なら目を誘い込んで搦め捕ろうとするか
で搦め捕られた証しかに　仄かな赤みをぼんやり火照らせて
横たわるような　なら突っ立とうとする形で飢えた鳥が羽を震わすように
汚れて
汚れに馴染みたいのか　汚れた音を聞く振りで
鳥達の羽搏きを膚に擦り付けようと望む間にも
水嵩が増すらしい　そうして
水の流れ込んだのは　其処から一時限りかに光りが消えたかで　その
消える様を額の縁に映して　それも何かの徴なのかと問い掛けようと
疾っくに先に消えたに違いないなら何が何処へ映ろうと
眠りに誘い込んで　掛け替えの無い問いを真下に垂らして沈めて行く

そうして見下ろされる真下で　そうとも知らず初めて渦を巻く　その
渦の直ぐに砕ける奥で罅割れた姿を曝すのが　それとも姿を隠すのが
独り　それでも渦巻こうと身を丸め約めよう
光りを求める円窓でも眺めて居るかに　断ち切られてだけ微かに響く
汚れ果てた音の厚み　な処が見付かれば其処へと
突き刺さって行きたい　そう思わせてならない徴では
二〇二五年五月五日

眠りは何処までも　石
な石は眠りの中にしか無いからは　大きいも小さいも無い
と誰が　石の中に入り込んでその
石を丸ごと唇と舌のように動かして
声にしようとして居るのか　いや
それを知ろうと眠りに入り込んだ振りをする誰かが居るだけでは無いのか
な問い掛けも直に眠りを夢見る眠りに溶けるように失せれば愈愈
必ず来るものが　唯その影を流し溢れさせるように遣って来る

石で有る筈の無い眠りをそっくり石に換えて呑み込もうとする
荒荒しさで
で　何が呑み込まれたのか　石でも眠りでも無いのならそれは
始めから石で出来た唇と舌が　いきり立って
その硬さを羽搏かせたいかに遡って已まない　それは全く
何時からか知れない程にも　ずっと已まない
ひっそりと弱弱しい咳のように吐き出される
動きを奪われた時を見据えるように僅かずつ
近過ぎる暗みを眠りより安らかに離れて行く
二〇二五年五月七日

裸は時を超え　なので骸の姿さえ斥けて　幼さを保つ
そう思われて仕舞う事とどう係わるのか）
望まれて呼ばれた筈の　裸の若い男の姿が無い
其処は　そう言い古されてだけ其処と見て取れる
と知れる程に裸の男は　裸でも男でも無くなって行く　鳥にでも蛇にでも

男は取り換えが利く　なので溶けて消えて行くらしい
そうして独り裸だけが　瘦せ細った肉の匂いを滲ませ
再び望まれる時でも待つかに　何故独り裸を晒すのか
な自らを語らずに居られないなら耳を澄ますのは誰か
そう尋ねられる其処に　裸の若い男の姿が見て取れる
それとも　もし見て取れないのだとしたら　その目は
独り裸の目に違いなくに　其処を見下ろす大空の形で
な事は疾っくに知って居る裸の男を望んで呼んだ誰か
その
誰かの目の奥に溜まった臭い水の匂いの息を吐いては
少しずつ溶けて消えて行く独り裸の自らを語る言葉が
目の奥の水を匂わせた女の胎を花で飾るかに拒むなら
きっと喜ばしい事に　其処に還って来られる何も無い
二〇二五年五月八日

水の面の　手触りそのもののような足跡を
水の裏から見上げるなら裏返される足跡が

なだらかに斜めへと光りを乞い慕って昇って行くのが
はっきりとした膚色を水に垂らし垂らし散らすように
透けて行く　その
透けて行くのが　膚色を裏返したなら暗い色の咳を
立て続けに響かせては何処へも還らない心根だけを
汚れた骨になってでも晒すようにも
昨日よりも先に失われたかな明日へと予め夢見られたろうか
な　温もりそのもののような
どうにも足跡では有り得ないなら　か細い掌の痕でも継いで行こう
再び還らないなら何の心根も手触りも温もりも自ずと削ぎ落とされて
足とも手とも見える　それとも唯
水の揺らぎの裏表を探って已まない一雫のように垂れる光りが
咳を堪えてやっと吐かれる息に弄ばれるかに
白い指をそっと触れ合わせる形に映るだけか　その
映るだけが　またその先へ映るだけかに　暗みに馴らされ頽れよう
その後を黙って付いて行く夢に閉じ籠もろうと　ぴたりと息を止め
耳も塞いで　そのまた先で予め失われてだけ姿を晒す
裏も面も無く確かにどうにも足跡なら微かな赤みだけが淡い望みだろうか

時の暗みに刻まれては消されようも無い昨日が　一塊に
一つ取り残されて　土に埋もれ掛けた石が見下されるかに
顧みられるしか無くに　失われた明日の偽りの夢そっくりに
それは静かに　其処から其処へ予め還って居たとも知れように
二〇二五年五月九日

空を逆さに磨く　つまり
磨く程に空は曇って　古くからの謎を隠して
けれど　隠される端から直ぐに曝かれる筈で
けれど　曝かれるのは少しも謎では無いのは
空を逆さに磨けば始めからそう決まって居て
空を昇る筈の雲雀は真っ逆さまに擦り切れて
謎は身を震わせ隠し事をすっかり撒き散らす
後はその零れた謎の欠片かを拾い集めて繋げ
磨き尽くされた空の下に輪を描いて並べれば
通りすがりの真新しい風が空を攫って行こう

何処へ？
古くからの謎と言ったところで　その古びた
何処へ？が知れないだけでしか無い
と　浅ましい限りの謎の絡繰りなどは
空を逆さに映す水の縁にでも曝かれて
擦り切れた雲雀は　空の謎にどう絡めたろうか　と
そんな事が取り留めも無く心に懸かるので　きっと
空を逆さに磨くのを何時までも已められないらしい
二〇二五年五月十日　端（はな）

心無い風と　空を隈無く占める陽の光りのせいで
こっそりゆっくり咳き込むように
心は柔らかく毀されて　流れ去る水のようなら　それは必ず
固まろうとしない血のようで　思いも寄らず己からさえ恐れられるなら
風も届かない暗がりの奥へと棄てられて　けれど
水は必ず光りの欠片を幾つも含んで巡って来よう　そうして

始まりは終わり終わりは始まろう　けれど水さえ
水と名指されたり時から　まやかしに違いないなら
左足の踝の上の幾重かに閉じた輪を描く古傷の疼きに
時などはあっさり砕かれようか　に血は恐らくは砕け尽きた時の濁りに
穢されてだけ浄められる　巡っては疼くように
なので知らず水は涸れ（何故なら　水は
穢されも浄められもせず）時から見放されたように膚は灼けるようでも
そうして　水と血の失せた匂いが睨み合うように　何一つ動かないなら
水も血も啜り尽くしたろう陽の光りだけが驕って　疼くように巡っては
換わりに何を吐き出そうか　それを凝っと
心を装う萎れた目が探り出そうと　待たれるのは朝か夜かも知れないで
古傷の疼きも　膚の灼ける熱さに溶かされ忘れられ
それでも時を潜り吐き出されるとしたら　きっと何処にも吹き渡れない
心無い風ばかり　な事を見守るのにも厭き果てた毀された心の行方とは
二〇二五年五月十一日

熱く灼ける思い出が　笑おうと強張る厚い唇が塞がり懸かるように
堪え抜かれた重たい日を　やっと終わらせて
何故一日は終わるのか　その訳を自ずと分かれば
途絶えがちな咳と咳の距たりに覗く冷たい静かさに　煩わずに済むらしい
涸れるばかりな井戸が　これ見よがしに掘られるように
な井戸の底に薫る　穢れるしか無い筈が美しいとしか甦られない大空の匂いを
幼児は独りで教わって居るらしい　その姿にこそ煩わずには居られない
な煩いも　群がる静かさに囲まれて食い千切られるかに
硬く脹らみ続ける額の遥か上で　溶けて行こう
熱く灼ける思い出も　咳と咳の距たりに消えた一雫だったとも知れて
二〇二五年五月十二日　堪（こら）え

そっと開いた掌の中に嵐を見る　と
膚を抜き破る程に重さを増す　その小さな暗がりのざわめく上に
ぼやけて薄い色の虹でも架からないか
か細い息と息を　繋ぐ為かに

だらしなく拡がり尽きる明るい朝の眺めを　醜い限りに固める為かに
それとも　穢れの底へ棄てられて再び戻らない明けて仕舞った夜への怖れを
虹の裏へ　そっと逃がそうとでも…
な　そっと…
だけが　柔らかい足取りで遠ざかって行くなら
鳥の巣の中で目覚めて仕舞った産まれたばかりの虹蛇のように
鮮やか過ぎる虹色を隠す事だけに　くねくねと拗る心を注いで
まだ何も口に入れた事も無いのなら空っぽな腹の底に溜まった何かを
身を浄める為かに　一思いに吐かなければならない　でまた
そっと開いた掌の中に嵐を見る　と
架かる虹の換わりに目映く輝くのは　小さな暗み
な暗みへ堕ちてさえ行けるなら
虹の後を追って消えたいなどと　望まずにも済むらしい
二〇二五年五月十三日

虹の向かう先は火祭り　それとも

虹色を滲ますかに鈍くも目映く輝く千切られた紙切れに
遠い日に火祭りに加わった時の事などが
くねくねとした手で記されて居て　けれど
それを読み解こうと焦る程に　彼の遠い日は激しく
この今に追い着こうと走るように迫って来て　更に
その時と時の間に　轟くように傾れ込んで来るのは
腐った落ち葉の積もる中へ　黙って小さな屍を埋めた手付きの
冷たさ　何故　何の為の冷たさだったのか
を知ろうと焦る程に　この手は彼の手の儘かに虚しく滑って行く…
どうにも揺り起こしたくて堪らない　その塞がれた時は
冷たさに奪われ果てても　却って苛立つ程に落ち着き払って
冷たさの先へ先へと絶えない火を貫き犯して已まないように
取り返しの付かない輝きばかりを増すだろうか
二〇二五年五月十四日

波も潮風も深い水の色も無い）　海の騒がしさだけが驕る

かな　果ての無い女の体の中で独り　溺れて居る女と擦れ違う
うっかり掠めて見て　そちらへ微かにも首を傾け
笑みなど浮かべたりしないよう　心して…　けれどその
心が引っ掛かるならもう　海の騒がしさに身を乗り出そうと構えて居ないか
ならば黙って確り耳を塞いでから　その
女に思いの丈でも好きに語らせ　消えるように立ち去れば済むだけの事　で
その先に　女の体に溺れて居る女の体が四つん這いで　細過ぎる爪で
己を掻き毟って已まない姿が　その
女の体を棄てて虹にでもなって　海の縁に鋭く突っ立つのを探そうとすれば
砂の濃い匂いを血のように嗅ぎながら四つ脚で身を低めるなら獣に違いない
落ちる陽に逆らって暗がりの中の輝く火花に纏わり付きたいかに走り続ける
影を　何処へとも追って行けよう
そうして海が齎す色形の穢れは悉く拒まれるのではないか
それとも　しぶとくも拒まれるのを拒んだ何が残ろうと
其処では　騒がしさ独りの騒がしさが騒がしさに溺れ　その
苦しげな呻き声も　己の騒がしさに紛れて仕舞うに違いない
追えた筈の影が直に息を切らすように女の体に象られようとされて
けれど　乞われるばかりに虹の形は思い描くのも儘ならないからは

二〇二五年五月十七日

女がふと水の音に耳を澄まそうとする　それは
空高くから今初めて響き落ちて来るか　それとも
女の体の中でずっと鳴り続けて居るか　化け物のように荒ぶって
どちらの音も惨くも食い散らかすのは　化け物のようでも　その
棲み処を突き止めようとすれば　女の胎の中へ行き着くしか無い
な　女が女を語る言葉を澱のように見下すなら其奴こそ化け物で　けれど
きっと優しい目をして鈍間な怠け者で　何時もぼんやりした頭で　手に出来る
獣の形を弄る他の事には目も呉れない　それともそうして
女の耳には聞こえない女の音を求めて　化け物の振りをして居るだけか…
傍らの
獣の形なら獣も形も嘘のように女が女を装う姿に見る見る近付いて行く
二〇二五年五月十八日　其奴（そいつ）

夜を締め出された光りに冷やされ凍るような
瞼は開いて緑色の瞳を覗かせて眠るようにも
見ても居ないだろう夢を荒荒しく掻き出して
その夢の縁で水の音を聞くしか無い女の側で　花なら
その開くのを見詰めて居るとそれはそっくり
その散る様に違いなくて　けれど女はきっと
それを認めないだろう　いや女など要らない
それを認めないのは
掻き出され深手を負った夢か　その贋らしい夢を映す遠い水の面か
もっと違う事なのか　確かにそれは　頑なに
女がして居る通りに　水の音に　ずっと聞き続けるしか無いらしい
二〇二五年五月十九日

悉くは見過ごされ取り返しも付かない　それが
何か一つを見詰めてだけ知れる事なら

その一つを見ないよう心懸けてはどうか
見過ごされた筈の多くが
その一つに替わって湧き起こって来るのでは無いか
と　しかし
その一つとは何だったろう
その一つから目を切ったばかりに　もうそれさえも見えないと為れば　何が
その一つに替われるだろう　そうしてまた
悉くは見過ごされ取り返しも付かない　…へは戻らない為に
見えた例しの無い何か一つに目を凝らしてはどうか　で
それは見えなくても何か一つなら　きっと
音を立てるか　匂いを放つか　味がするか　いやそんな事では無く
それは唯　その　有る処にそれが有る事を知らせて来れば　それがそれで
目を凝らすとは　其処へと身を繋げて行く事の他に無いだろう　で
と　しかし
見えた例しの無いならそれは　贋らしい夢の端を逃げ去って行く姿でしか
その有る事を知らせては来ない　ぁあそうして
心を騒がせるのは何？　と
心ばかりが散り散りに砕かれて行くようで…

見れば（何を？　も無く　その無いからこそ見ようと出来る）
それが有る処に有る其処は
見過ごされた悉くを呑み尽くしたいと望むかに
だらだらと拡がって行くか　そうと分かっても
其処へ繋がって行こうとする贋の夢の端を逸れ懸ける夢の欠片が
目を驚かせたいのか輝くように
ゆっくりとでも果てなく転げるなら　もう何処へ戻れようか
二〇二五年五月二十日

深い霧のせいで　背中から首から
顔と手足まで火傷を負った痕は治らない　霧の日は
今では膚を覆い尽くしてしか出歩かない　それとも…
と　火傷の痕の疼きかが語り掛けて来る　「
霧はあなたを導いただけですよ　あなたは招かれて
その物の形を見上げて跪き　祈ってましたよね
その物の形をもっと確かな姿に象れないか　それを

どう考えても　どうにも出来ずに　それで
どうにも出来ないと予め決まって居たとは分かって
こんな事は終わらせるしか無いと思い定めようとも
その物の形もあなた自らもどうにも出来ないならと
霧に刃向かうしか無くて　けれどそうして霧の奥の
触れただけで膚を焼け焦がす　ほんの一時だけ現れ消える
蕾の綻び始める匂いの滲みた　一雫が
光りの欠片を舐め回すように　戦慄いて…　で後はきっと
あなたは身一つで其処へ　ほんの一時さえ抛り棄てるかに」なら
飛び込んだにしろ　あの一時の匂いは背負って仕舞ったかで「いや
匂いが匂いで無いのは　火傷の痕が証して居ますけれどね
二〇二五年五月二十一日　戦慄（わなな）いて

何に向けても蔑み嘲る心を持つ者は　その心を
鏡に映すように　くっきりと見て取らずには居られない
で　その心の似姿を追って行く果てに　神を見ずには済まない

なので神は　悉くを蔑み嘲る事しかしない
鏡に映るだけと分かって居ても　その嘲笑う声が聞こえて仕舞えば
何をも蔑み嘲る心は　神に蔑み嘲られて居ると分かるしか無い　その
何をも蔑み嘲る心は　神を蔑み嘲り返せるだろうか　それは
必ずそうして居る筈にしろ　その嘲笑う声などは掻き消されて仕舞おう
なので
悉くを嘲笑う神の声が聞こえる事と何も聞こえない事とを　もう
耳は聞き分けられない　そうして
何をも蔑み嘲る心も神も　唯有りの儘に姿を隠せるらしい…」と
これは何の声か
二〇二五年五月二十二日

蔑み嘲笑う声なら微かにも
神の招きを真似るかに常に聞こえ　けれど
常に聞こえるなら　聞こえないと同じでは　と
疑われる先で　背を向ける儘に

神と異なる悉くが　乾いた声を漏らすかに
それぞれの招きを携えて遣って来るのが見えれば
聞こえるも聞こえないも無く　それは疑いようも無く耳に滲み通る
それを耐え難いなら　耳を引き抜き潰して焼いて犬に喰わせようか
な事も　耳が唯の飾り物と知れるだけで
それは聞こえて仕舞う　きっと
楽しいからだろう　けれど楽しいはそっくり苦しい
そのほんの狭い間でしか息は継げない　と分かり切って居るなら
蔑まれ嘲笑われる事から逃れられない　とも分かるしか無い
消えて無くなる望みも奪われ　聞こえて仕舞うそれに近付けもせず
二〇二五年五月二十三日

大方は呻き声（それとも言葉はどれも呻き声の内）で何を声にしようと
其処に（何処に？）神が居ると仄めかす事しか出来ない　その
貧しさ・見窄らしさ・何でも無さが　望みを奪って行く　その
望まれるのは　軽やかに甦る時の他には無かろうが　目の前は

陽が落ちる重さを猛らせ空を覆う一片の花弁かな赤みに犯され
神を蔑み嘲笑い神に蔑まれ嘲笑われる者は
な自らの朽ちて行く姿を楽しむしか無いか　と
重過ぎる一片の花片の厚い肉が切り開かれて行く奥に覗く　それとも
その更に奥の膜に包まれるかな中で
小さい限りに象られて重さも軽さも　まだ知らない
けれど　時に就いてなら知れる限りを知れて居よう
縮んで行く（からには）拡がり頽れ　そうして
何かを掴まえたとだけは知れようと　弾みで
落ち果てた陽に誘われるかに　徐に頭を擡げたが徒でか
掴まえ損なった悉くの後を追って行く　な
確かな楽しみを噛み締めながらも
虚ろな神に惨めに縋り付く振りはして
二〇二五年五月二十五日

此処は

夜では無い　が既に　そしてずっと夜なのは
夢では無い　の夢が　どうにも巧く掴み取れないからで
けれどこれは　己が己を騙して遊んで居るだけ　と己に見透かされれば
どの己が己を騙すか　あやふやに　暈かしに暈かして
無くした夜へ戻ろうとする構えだけは鮮やかに翳して
な姿なら　嫌でも遥か遠くへ己の時を送ろうと試みる
にも　息も継げない程に活き活きと　知らず
どうやら疾っくに掴み取れて仕舞った
陽に灼かれ　その陽にだけ夜の匂いを嗅ごうとする潰れた目なら却って
棄てられた夜の先へ何処までも陽独りを追って行ける
爛れたら脚をもう片脚で引き摺るような音が掠れるなら
片目に違いない　それはけれど
胸鰭を捩り捩りして泳ぎ回りたい姿で　な
姿が安らう　居処を探して居ないか　其処が
夜では無い　をあやふやにしたくて
二〇二五年五月二十六日

腹から冷たく痩せて行く　それを
労るようにも怒るようにも　背鰭を生やして揺らすように
身は熱く火照る　それに逆らうように腹だけが痩せ続ける
な腹なら　いっそ無くなって欲しくても
切って棄てたくても　儘ならない　儘よ
などと勢いを付けても　勢いだけが腹から虚しく食み出して行くなら行けよ
で　何が冷たいんだっけ
と　見下ろそうと見当たらない　何が？　腹が？
まさか始めから少しも腹の事では無かったか　と
一から何かを探し始める　それとも　疑い始める
探す事さえ疑う事さえ　疑えるのなら疑いたい　でやっと
探さなければならない物も疑わなければならない物さえも
失われて居ると知れる　細く尖った痛みを伴って
いや違う　痛みはそうして　却って和らげられて居ように
そうして和らげられて仕舞う事が耐えられない　それとも
耐えられないのに易易と耐えて仕舞える事が耐えられない
で　何が冷たいんだっけ）

と　元へ戻るのでは無く　それは遥か遠い処から尋ねられ
尋ねられる事も疑われる　そうして
また活き活きと　もう腹など要らずに冷たく痩せて行ける　それは
疑いなど全て吐き出せたから　と痛みに縛られ腹を捩らせ　な腹の
身の熱い暗みから切り離され　遠くの明るみへ向かう姿を見送って
二〇二五年五月二十七日

無くした物を見上げて居る　どうにも
冷たい匂いを隠されて居るようで　そんな
冷たい匂いを隠す無くした物が見て取れて居るとしたら　それは
刎ねられて　独り空へ突き出された誰かの首と思えてならなくて　で
首の無い誰かの体は川を下って行くだろうけれど
川は蜷局でも巻くように海を恐れでもするように
何処へも向かわない　さも閉じた姿で驕り昂ぶる　ならば
と海を焦がれて煌めく水があちこちから湧き出し
先ずは取り敢えずは　刎ねられる首を探し回るに違いない　けれど誰も

逃げ惑ったりはしない　寧ろ進んでするりと首を差し出すのでは無いか
で　お前はどうなのかと尋ねられ　慌てて心の内を覗き込もうとすると
やっと何かが狂って居ると分かる　けれどその狂って居るのはどうにも
覗き込まれようとされる無いも同じに静かな心が匿われるべき筈の　唯
冷たい匂い限りが其処に窒がれて　びくびくと震える姿ばかりと知れる
誰？
などと（例えば　首の有る無しを確かめよう　などと）その姿に
誰が係われようか
二〇二五年五月二十八日

女の　蜥蜴そっくりな尻に追い詰められ
なら　その尻の真ん前へと逃げて遣ろう
と　赤い蕾を探すように尻の穴を弄る筈が
蜥蜴の尻を鈴を振るかに鳴らそうとしては
女の姿だけが　ずり堕ちて行き
その姿をうっかり追えば

目指す女は光る尻の形で
光りの内に淡い色の草木を様様を入り混じらせ　繋らせ
飛び跳ねて行かないように　しっとりと匿うらしい
と　それらを見届けた証しかに
鈴を振る‥　その
音に追い詰められ　その音の真ん前の穴の中へと逃げて遣ろうと
企てるしか無くて　にしても女の尻に抗い
光りの外へ飛び跳ねて行けるのは何だろう　それらは
きっと花を咲かすだろうか　いや遠過ぎる
鈴の音に息の根を止められ　時は萎えて仕舞おう　けれど
女の尻など蜥蜴そっくりと　蜥蜴そっくりに笑い飛ばす企みなら
まだ息を弾ませて手の内で　捏ね回されては女の事は
女の尻を追うしか無い女に　そっくり放り出せもする
二〇二五年五月二十九日　音（ね）

女は逃れられず傷付きたがって居る　それとも

傷付きも出来ない事を喧しく嘆いて
な　蜥蜴のようにうねる喉の奥から
な　自らを喜び勇んでは力を漲らせ
腹の底をどろどろと覗き込むように
もう遠く手の届かない時の切れ目を
逃れられず傷付きたがるばかりとは
な　女の真ん前へと逃げる振りなら
な　自らの戯けた振りさえ嘲り笑う
と　指差される切り曝かれる其奴の
咲くしか無い花を冷たく愛でるかに
そうして誰も居なくなったかな処で
贋の呻き声だけは解かし解かしして
二〇二五年五月三十日

息絶えたがって居る
吐かれるのはまた蜥蜴の姿で
絶えた息を手玉にとって弄ぶように
息を荒く弾ませる
掴み取りたいかに
そんな事だろう
して遣ろう　と
な　お前は誰だ！
身は時の先へとまで飛び散って
傍らの女を遠ざける
時は凍って行こう

同じ花の名を繰り返し濡れた唇に乗せて滑らせる
な　花の名は知らないし嘗て耳にした覚えも無い　なので

その花が腹の下に溢れる様をひたすら思い描いて
その花を咲かす音を喉に響かせなければならない
腹に花を咲かすような痛みが身を震わせるようで
花の名を呼ぶ鋭い声に換え喉の奥へ刺し込みたい
花の名は荒ぶる眠りに冷たく磨り潰され逆立ってい
花を散らす嵐の名とも聞き誤られ唇を青ざめさせ
花の姿が氷の欠片を重ねた様かに象られ瞼を叩く
花の名が何時までも繰り返し呼ばれ続けるからは
花の陰で息をして蹲る自らを懐かしげに恐れてか
夢の痕を花の残り香に添う蛇の姿が見え隠れする
花を咲かせた草の堅い根にはどう身を拗らせても
心を花の厚みに痛みを植え付けたいかに荒ませて
二〇二五年五月三十一日　音（ね）

それとも
その痛みを
かにしろその
眠りは何の名も欺くなら
眠りを醒ます為に
な夢に違いない
で　女の腕かに
くねくねと
その
辿り着けず　舌は

六月

青黒い空の遠い縁に切れ切れに湧く硬そうな雲を幾つか数えるように
姿を現さない蛇の鋭い笑い声を取り集めて行く　それは
腹の底に堅い根を張る草を繋らせるのと一つの事で　その
一つ限りの内へと素速く飛び過ぎて冷たく這い回るのは　いや
それらは全く透けて煌めいて　這い回るかもあやふやに
腹の底の狭い中に押し込められた切れ切れの笑い声を
更に切り刻むらしい　としか分からないのでは無いか　それもまた
あやふやなら　構わない
髪の震えを数え切れない蛇に擬えでもして逆巻かせ
遠い日は青黒い空の奥に何を匿い続けるのか　それを
曝かずには居られないかな眠る儘に狂ったような身振りで
青黒い空の下から締め出された涸れた狭い水辺で干涸らびて
贋の寂しさを驕り歌う女へ　匂いも無く音だけの花の切れ切れでも
贈ろうか　に
戯けて居られるのも何時までかと　したり顔が取り柄で
二〇二五年六月一日

その揺らがず動かず一つ限りに続く声音の先になら
どうやら　産む事だけが有りそうで　その
有りそうなら　必ず有ると決まり切るよりもずっと
産む事だけが有る事が　それ限りに絶えようも無くどろどろと溢れ返り
火を銜えたような肉の穴の奥から躙り出されるのは
懐かしげに　暗がりだけの海を向いては弱って行く
取り出され懸けた鳥の目の形の　その若さを戯け煌めかす　産む程に
痩せた屍の束ねられたような重さで　それらは
それらのまるで知りようも無い徴の連なりに換えられ
おどおどと沈み崩れるように海の向こうの安らぎへと　平たく薄く刻まれて
で　きっと取り戻される何の声音より古い元の姿なら
影のようにも打ち寄せられよう水辺で　蹌踉ける身は
二〇二五年六月二日

涙に悲しみを染み込ませたいのか嘘吐きめ
水色は闇を裂いて刺刺しい　それを
痩せた背が負う冷たさを水を撃つように抛り棄て
愛おしみようも無い穢れた足を折って泥濘に沈めるように蹲れば
悲しい色を眠りを妨げるかに膚に流し刻めるとでも…
で　土の匂いを麗かに嗅ぐ振りをして
全てを手に入れたような顔付きで
柔らかい筈が惨めに強張った目付きで　そうして
響き合う悦びの訪れの移り行きを
怪しげに高みを騙る姿で隠そうとする
それとも　曝く
な裸を晒すかに立ちはだかるのは　何の真似か
足下とは遠い限りの真向こうへまで打ち寄せられて行くと言い募られるのは
な　色だけは悲しみの驕り狂いたいだけの　それはきっと
胎の奥を吐き尽くすように産みたいだけの
血の匂いを薫らせる茂みの驕りで　冷たい眠りに巻き付こうとするらしいが
茂みの奥に救い難く水辺が覗くなら

痩せ細る間も無く衰えるばかりな影の脹らみは　もう
姿を失ったも同じに　今更何一つ取り戻しようも無い
二〇二五年六月五日

七月

其処へまで歩いて行こうと思えたのなら　強さ
な　強さだけが先ずは有って
歩いて行けそうな処を探すように促され　で目を瞠る先に其処が現れれば
な　強さは　強かにもすっかり弱さに自らを擦り替え
寄り添うような振りさえ見せるのは却って　惨い事で
何も聞こえない明るみの　暗みに躓くばかりな身を虐げて已まない
な　其処には　其処に近付く悉くを滅ぼす喜びでも隠されてようか
に　強さと弱さは擦れ違う　それとも強さも弱さも無くて

唯　擦れ違いだけが始めも終わりも無く有って
それから目を逸らすには　目を瞠れる先辺りに
歩いて行ける其処を　望み抜く他は無かったか
と　これは問いなのか
な　問いかも覚束無いなら擦れ違いさえ怪しい限りで
問い無しにも知れるのは　遠い幽かな響きから交わりを救い出そうとする
な　交わりの行方の揺らぎに惑い歩みを止めるしか無い一つ切りの息継ぎ
の　短さだけが遠い響きを超え更に遠のいて行くのを
残る望みと捉えられようか　その答えを
強かにも暈かし続けて変わらない…　それは
二〇二五年七月九日

足跡の斜めに切れ込む縁に
低い草の花は踏まれる為に咲いたかな姿で
待って居る　何を？
足跡が残るからは　必ず誰かが踏ん付けた筈なのに

誰かの重みはもう影も無く　後を追うように花も軽軽と
消えて無くなりたがって居る　それに力を貸そうとする
今表れたばかりの光りが匿って持ち運ばれる小さな闇の
なら花より先に消えて無くなりたがっても居よう鋭さ　を…
そうして　な花も闇も溶かしてて巡って行かなければならない　何処を？
も何も　何時もの決まり切った通り道で頽れて行った
何時表れたか知れない旧い光りに就いて記された　形
な形が倒され踏み躙られ　消えて無くなって行く様を　自ら
身を以て道端で死んで見せたがった姿で死んで見せた
誰か（彼を愚か者と呼ぶ声が直ぐに温い風に掻き消されたのは
能く知られはしたが　そのせいでか疾っくに忘れられ）　…を
こっそり泣く為に草の花は　低く
咲いては踏まれなければならない　苦しみだけは除かれようか
に

二〇二五年七月十一日

道が交わるなら近付いて居るから　で
交わる辺りは　こぢんまりした丸の中にすっかり収まる　それは
其処に身を置いて滲みるように分かる　其処から
踊るように回して行かなければならない　身をか　身を取り巻く眺めをか
そうして増えて溢れそうに
速さが生まれるけれど速さでは遅過ぎる
けれど速さを追い越せば何もが止まって仕舞う　いや
そうなってこそ　丸の中を見渡し　見越しさえして
丸の中に収まる身を　道が交わる様に似せて　硬く
くっきりと踊るように回して行けないか　を
丸が曲がりながら尖りたいかに衰え　丸の外なら角だろうか
な丸と角の交わる辺りに浮かび上がる筈の
転げながら絶えて動かない形を探して居る
二〇二五年七月十四日　角（かど）

見える筈の石なら　自らの色形を独り測って居る筈で

見える筈の無い石から妬まれ　色は褪せて行くけれど
形を弄る振りなら　身を幽かに震わせようかに出来て
色より先に消えたと今知れた　形の明るみと暗みとの
入れ違えを滑らせ繰り返して　石の硬みを甦らせよう
な
獣道を飛び飛びに渡り歩いて閉じた円い窪みを暖める
清かな声　の行く先
を　先回りしたが徒か　で却って
遅れを取ったらしくに　見知らぬ夜に沈むのを恐れて
神を呼ばわる　な人に
狭苦しい家に籠もる儘　出会ったばかりに
追える筈の清かな声は　散り散りにも傍らに迫り響き
苦しみは何も知らずに　消えて行けた僅かな温もりの
見える筈の…
二〇二五年七月十九日

夜に満たされた後に残される光り
へ　幽かに濁る薫りが転げ込むなら
置き去られた夢の端を映すに相応しく立ち昇る　それとも
かに花なら待ち受けよう陽は　傾く限りに傾いて其処で
昼の空ごと溶かす青い海の深みのように　それでも
触れられない小さく清い流れを差し招こうと
溺れ死ぬので無いのなら　それに等しい男と女の遣り取りのように
与え合う企みを冷たく圧し放って
転がる岩を育てるようには
交わらない　そうして交わらなかったのに
扉は直ぐ近くで開かれて居たろう
に黙って　大声そっくりに
その影そっくりな光りの姿を直ぐに通して欲しい　と叫ぶ誰かを…
二〇二五年七月二十日

目に見えたなら環を重ねるように見えて見知らぬ声は

その傾れ込むのを已めない　更に見知らぬ様を拉いで
な声をも置き去りにしたのなら　腹の底辺りは
小舟の揺れるように　その
揺れる数を数えても　数えても溶けて消えて行く先に
数から零れ堕ちて却って姿を現す　舟を慕う顔付きの
清かに襤褸を纏った孤児は
もう消えて跡形も無い　人達の残らず
山へ帰って戻らないか　海へ身を投げたか
の　どちらとも定め難い
潮風が掠める硬そうな波間に湧く薫りを随え訪れよう
花の姿と交わっては　誰のとも知れないかな淡い影を　な影で
空も海も包み取って　隠しては
穏やかに笑って居る
二〇二五年七月二十三日　孤児（みなしご）

ふと恵まれた　ささやかな騒がしさを抜け

思い掛けず手にした　数えられる程の木の実の塵を払おう
首吊りに適う高い木は良い薪になるらしいぜ
な戯れ言を　暇を見付けては持て囃す者らはもう
獣を殺す夢さえ見ないだろう　違うか
と周りを見回しても　草木は枯れ　土は紫を帯びて痩せ
冬の寒さを匿う弓形の　凍る木の根が
棄てられた夢に拘るなら　疾っくに息絶えた末の
野晒しの陰に蔓延って‥いや
な陰なら輪切りにして輒を懸けられたかに　誇らかに
首飾りに見立てて何処までも練り歩こう
禍禍しい災いの星の　連なりを絶つ心積もりで
余りにあべこべなら　却って知らず結び付いたりもしよう
で　果ての無いこの世の望みも丸ごと
命の果てなど易易と超えて　激しく乞い焦がれられる
な様が僅かにも　騒がしい光りの縁を掠めさえすれば　そうして
また其処を抜けてさえ行ければ
木陰を覗く目には　絶ち消された息の欠片が映って
強張って干涸らびた幼い瞳へのささやかな声掛けも

うら寂しい歌のようになら　せめて奮わせられよう
二〇二五年七月二十五日

泥臭い眼を更に泥臭く誇り　またそれを誇り直して
其処では分かる事しか分かろうとされない　そうして
彼等は　穏やかな思いの襞を味わい尽くすように貫いて
透き通って何の色にも染まらない色を　一色に旗に掲げる
けれどやはり色なのだよ　色は透き通る程に
穢れに囲まれ裸に剥かれ　濁って汚れて行くしか無いのだよ
そうとも分かって堅く変わらない美しい安らぎに拉がれ
骨まで砕かれ　けれどその痛みまで砕かれれば
哀れげな笑みを頬に翳らせ　浮かれ騒ぐしか無いか　にも
な軽やかさに煽られ　何の痛みも嘲笑う程に鮮やかに　で
な構えが何時まで色を保てよう　せめて
褪せて行けるならまだしも　透き通っての色では
泥ばかりを映す眼が唯泥を眺めて　それでも

色を逃れられず重なる疲れに　息絶えるまでもと頷き続ける
にしか　声を出せない声が　お前を何処へ導くか
それを　分かろうとせずにも分かるしか無いなら
泥の色ごと根刮ぎにされるのを　そうとも分からず
なのでこそ　そうと望んで已まない独り切りに耐えられずに
同じ眼の色の鳥を空に探して見付かる
その鳥の眼が刃のように尖るのは
鳥を襲う蛇の卵を抱いて孵すしか無いと分かって居るからで
二〇二五年七月二十七日

八月

歌に怯える耳だけを携え
身はすっかり虚ろかに

煩わしく追って来る夢の痕を悉く踏み越して行く
な勢いばかりにしろ却って
忘れられない歌に苛まれ
道を逸れては（いや　逸れる程に
逸れようも無く）
後を付けて行く　けれどその
歌なら歌は何処？　それとも
さて何の後を付けて行くのか
歌に怯える耳だけを頼っては
そう望みもせずに　探し回るしかないようでは…　それは
二〇二五年八月十六日

空はもう　ずっと前から大人で
落ち着き払って　もう何も忘れて構わないかに黙って俯いて居る
な空から見れば　空を見上げるのは　誰も彼も皆きっと
頭がおかしな程に子供で　足下も空までも始めから無かったんだ

などと　直ぐに思い至れる振りをして
な　身を躍らせ
な　身と戯れて
しかつめらしい空が霞む奥に隠す底知れないかの　青を
笑い飛ばす　で
陽は　それに傷付き恥じらって　自らを蝕んだのだろう
跡形無く消えた他に無い
跡形無く消えたって？　それをも再び笑い飛ばせるなら
何時までも子供な儘な子供達は　確と足下を踏み締めて
躍るに身を任せられる
二〇二五年八月十七日

昼の長く輝いた青に犯された目は
知らずじわりと痛みに取り囲まれ　もう逃れられないらしいけれど
どうしたところで目は　その痛みからは逃れられないのかな
と　目から痛みを切り離して見る

と　何が見える？
と　自らに尋ねられ　狼狽える自らの心が見透かせる
極　薄っすらと
な　薄っすらは　更に薄っすらを窮めずには済まないように
呪いにでも頼るしか無いように…　などと呟いたのか
な　呪いからこっそりと　痛みとは真向かいな甘みを盗み出すのは誰？
に　な誰が誰を許さなければならないか
を　知れるのは朝を限りなく遠ざける昼の青だけか
昼からすれば　朝は全くの夜なのだろう　その
夜の底で　その誰と誰とは　きっと手を取り合い励まし合って
目の　海のように大き過ぎる痛みに浮かび漂って
一人は朝へと乗り切り　もう一人は胸を裂くように腕を拡げて
この世の虚ろの要の振りでもして　さぞ取り澄まして居ように
な事は疾っくに忘れて済ましたかに
昼の青に犯された目は　じわじわと縮むばかりとは…　ならば
せめて　昼の青の自ずと裂けて行く音を掴み取らずには
何処に立ち尽くすも行き泥むも叶わない筈で
二〇二五年八月二十四日　呪（まじな）い

この目が虚ろなんて知れてよう　高が言葉の綾で
虚ろなだけなら何も見えず　見えないのでは目では無いから
目はずっと遠くから絶えず送られて来る
空を搾った一雫がやっと届くかのように　贈られて来るなら
心さえも虚ろの拡がりへ砕け散るだろう　な
目は何に触れるだろう　な
目が触れる事の出来た何が　目との遣り取りを喜べるだろう
虚ろへと渡り尽くされた心を破って何が
空へと衝き上がって行くだろう　と今も
それを見上げては身動きも取れないなら
或る一つ限りの事をその一つ限りの通りには分かる　けれど
一つ限りなんて　まるで狂って居る筈　とだけ分かるにしろ
狂って居る一つ限りなそれの　朧な尻尾位は掴まえられたか
と　夢の様様が汚された限りに垂れ流されて行くのが見える
この目が虚ろなのは　何も言葉の綾なんかじゃ無かったんだ

虚ろは何を装って　この目を騙したいのかな
と　転げようとしようにも　目は
臭い息を吐く喉の奥へと狭苦しく呑まれて行くかにも
遠ざかるばかりな空を虚ろに見上げ　そうして
尚も衝き上がろうと奮い立つそれは…
二〇二五年八月二十五日

始めが有って終わりが有る　そのどれも
搔き消されるのを待つだけなら
嘘偽りに決まってように　ならば何故　始まりと終わりは
何処を向いても　数知れず湧き起こって来るのか
きっと速い影だけが動き回って
贋の始まりと終わりを見せ掛けて居る
けれど速過ぎては　影は掴まえられず　唯
始まりと終わりの狭間で　その虜になって
狼狽え続けるしか無い　嘘偽りに縋り付くしか出来ない報いで

孰れは　な身は　その影に滅ぼされるしか無い
そう知れたところで却って　滅びを急ごうと焦るのがやっとで
それを逃れる為に頼れるのは　影に勝る速さだけ
けれどその速さが当たり前だが　滅びの時も速めて仕舞おう
いや　それで構わないか
速さは　嘘でも偽りでも無いから
速さは　影の手下のようなもので　思い掛けずも
影に随って動き回れたなら　それを喜ぶべきではないか
始まりと終わりの贋の姿をはっきりと見定められたなら
それに勝る慰めを何処に見出せよう
などと考えてみる　けれど
その考えも　その始まりと終わりからは逃れようは無い　で
また日は巡っては　その日は
速い影がまた更に滲みて　暗みを増して行くらしい
二〇二五年八月二十六日

取り返しも付かず割かれ閉ざされ何も伝えようとしない欠片
と　また違う形の同じような欠片
の　どの欠片ともそっくりなような隙間
が　何処までも奥深くも奥深さを無くして動けない欠片
に　見えて来る　それを
覗けば覗いただけの事は有ろうけれど
そうすれば必ず滲み出す頑なな喜びに　心は強張るばかりなのも
もう疾っくに知れて居て　何時も通りに目は背けられるしか無く
背けた目の前は冷たい水さえ水に溶けるように滑って行く
その先に　それとも先の無さに戸惑うなら
その戸惑いに　惑い直す
その哀れげな眼差しに絡み　付いて来る
のは　まるで昔話に語られた　目覚ましくも
屍の在処を知らせる小鳥か　確かに
囀り羽搏く姿は鳥でも　誰もそれが巣に戻るのを見なかった
なら　翼を拡げる姿と鳴き声だけの　鳥に見せ掛けられた
心の動き　欠片と欠片の隙間に囚われ堕ちて行くような…　それとも
取り返しが付かず割かれ閉ざされた　心の動きの

それもまた　欠片なら　それは　望まれずにも
数知れない賑やかな音に囲まれ　その
激しく飛び跳ねる音達は夜と朝の境目で
時など引っ繰り返し　夜も朝も薙ぎ倒すような音色を果てなく奏でる
な眺めが目の当たりにされれば　きっと何事も無いかに言われよう「
何と多くの声が犇めいて居るか　しかもどれも土の下から甦ったような
声はどれも一つ一つ違う顔を持ち　違う瞳を輝かせ
その内のどれがとも無くにすっかり
私達の顔になって　活き活きと動いて空を見上げ
鳥の姿さえ遥かに見下ろす程に昇って行ったらしい
な眺めを偶に見付けるのを生業にして　土塊から土に塗れて生きて来た
私達とは異なる道を進む多くの人影の暗過ぎる一塊が
風に晒され　浄められながら朽ちて行くなら
小鳥の生まれ変わりを引き受ける　何時までも幼い歌い手達は
予め言い交わして居たように　屍の生き返りを改めて細細とも歌い継ごうか
跡形も無く消え去る事で
二〇二五年八月二十七日

頭が狂う頭　身が身悶える身　影が落とす影　芝居が芝居をする芝居
茂みが茂る茂み　女が女にサカる女　いや唯
頭が狂う頭　で
余りに言葉足らずなせいで　言い尽くされて居る
言い尽くされが言い尽くされる言い尽くされ　いや待てよ
息が息をする息
なら　抜け駆けするようにも　逃げて行けるかも知れない
な息限りを認めては　な息限りを潜める身を赦す処へか
溺れて息の根を止められる程に　身には力が溢れ返る
でまた頭が狂う頭が独り残され　直に打ち消され
何処からか吹き込まれた息が　息が息をする息を探すだろうか
な　息の脇で
水が回る水が回るように　音が音を立てる音が
失われた耳へなら　微かにも滑り込めようかと
そっと囁かれよう　そっとがそっとをそっとに
二〇二五年八月二十九日

音は響けば終わり　響き損なった音が　するりと
音も無く轟き堕ちるのを受け止めるのは　例えば
女の胎　そうして
音も無い轟きでは　直ぐに産み落とされるか
真っ直ぐ下へ　胎から流されるかで
な　音への思いが　あれこれ已まず　足下へ打ち寄せて来て
濡れるのを厭う足は　音ばかりの響き籠もる草陰へでも走ろうとする
けれど　もう遅いのだろう　それの赦される為の時は
腐った女の胎に蝕まれ
赦しを求める声なら絞り出せたにしても　何処にも届かないし
声は響けば終わり　然も響き損ないもしない
なら声を返せ　と　例えば優しい振りを誇る
風の音なら鳴って呉れようか　に
風の音は　産みも流しもしない　音も無い
そうして　女の胎の硬い底へまで行き着くしか無い処を求め

響くも響かないも無い音と言う音を拒む血の匂いを潜ませる
くっきり花を咲かせたようにも丸い影を落とす草陰の周りを
かさこそと音と戯れ　転げ回りもしよう
二〇二五年八月三十日

九月

逸るのは　もう其処に行き着いて居るからで
尚も毀されて行く眺めには　疵の一つも無い
その訝しさに鈍る心は　何を疑えば良いのか「
な心なら土に根を張る事は無い　その距てられた
土の匂いを　空の大きさを超えるかに吸えよ　跳ねるように
その息が直に胸の底を裂いて　底の抜けた奥の暗がりを
数知れない塵が棚引き　狭い海を恋いながら途絶えるなら

心は裸に剥かれ
ぬるりと尖った痩せた人影が　硬そうな細い扉を開けるのを
心ならずも見て仕舞おうか
扉の狭げな先には　唯何も無い眺めの光りが洩れて脹れて溢れ
けれど急くように　扉ごと消えて翳んで行くのなら　人影は
小石が砕けるように毀れ懸ける　そのほんの隙を狙って
踏み込んで行かなければ」微かな風さえ翳んで行くけれど
翳むのを已めないなら風は　更に微かな儘に吹き已まない
それは始まりの終わりでも終わりの始まりでも無く
終わりから始まりへの間を迷う揺らぎでも無く　この
鈍る心を置き去って「まぁ待てよ　扉の向こうへ
踏み込めてさえ居たのなら　心は今頃独り人影に乗り移り
その姿が扉の奥の明るみへ　確と歩みを進めるのを　その
ぴたりと後ろに立って喜べたろうにな　訝しさに輪を掛けてこそ
二〇二五年九月二日

苦しみ　とは唯　或る一つの
終わり　をそう言い換えただけなのに
苦しみは終わらない　と思えて仕舞うのは
終わりには終わりが無いからか　を
何処までも尋ねて已まないのは　何故？
の何故も無い　だって
終わりには終わりが無い　に終わりは無いから
：で　戻って
苦しみ　を探してみて　さて見付かるかな　を
何処へ尋ねて行けようか　と　ふと行き泥めば
辿り着けたに違いない其処へ時を巻き戻そうか
知れない誰かに甦る苦しみへ引き込まれるしか無くに　で
粉粉に砕け　それを終わりの無い終わりが呑み込もうとする　けれど
それを　とは何を？
の何　に微笑みを誘う湿った匂いが嗅ぎ取れたのなら　もう
苦しみに足でも生えたように　苦しみが苦しみを探しに行って居よう
終わりでしか無い　としか終わりを拒めない何処へか
二〇二五年九月三日

赤は閉じて居る　貝のように
なら　貝のようにも開けよう　生きて居るならね
閉じた儘の赤などは疾っくに捨てられ　石にでも還って居る
な　閉じて生きる赤の赤に比べればずっと狭い下を　足早に
湿った匂いに犯されるかに　身を硬くして通って行く
もう戻らずに済むと思えて素速く赤の始まりの辺りを顧みたろうか
鬘に鬘を絡めて開かれ切った赤の眺めが　迫るとも無くゆったりと
締め付けて来るでは無いか　それとも苦し紛れに
もうこれは赤では無い　とでも言ってみようか
すると喉が詰まろうと　首を絞め続けられようと
唯生きて居るしか無いのを　思い知らされる…
赤を裏切ろうとすれば　その度に赤から先に寝返り裏返って
赤を超えた先に堕ちて行く身は　きっと
赤に代わって　閉じてはまた閉じてを繰り返すのだろう
成る程それでこそ何と言われようと　赤は赤で

二〇二五年九月四日

偽りを口にすれば（と言うか
口に出来るならどれも偽りで　孰れは曝かれる）
それを避けるには黙るしか無い
黙り続けてだけ　周りを欺いて居られ
それを貫けるなら　何をも誑かす儘に生き延びられよう」
なんて泣き言を口にしたのは　なのでそれは偽りにしろ
誰なのか？　を
切り無し話しに身を投げたような心持ちで　更にはその
ぐるぐる回る話しを身一つで根詰りさせるような心積もりで
けれどやはり直ぐにそれを諦めるように　巡って行く
そうしてぼんやり現れるか　見えなくても嫌でも
直ぐ其処に聞き取れて仕舞う　時が描き出す環は
当たり前に静まり返って居て
それよりもっと身も心も静まり返って居るのが顧みられるのなら

誰かを探す誰かは　息絶えてこそ此処に遣って来られたのだろう」
なんて泣き言にしろ　それを黙った儘
口にしない　と心に決めるのは　息絶えたのならもう誰でも無い
‥　そうして全ては喜ばしくも　欺かれようか　と
偽りを口にすれば
二〇二五年九月五日

静かさが踊り狂って外へ流れ出る　その外が
静かさを溜め込むばかりなら　其処はもう何の外でも無く
静かさが果てなく増して行くばかりな　笑い声とも　その
静かさは聞き違えられ　それを堪えながら息を継ぐ　その
一息一息の貶められ穢されて行く先の　笑い果てようと声は続く
な声の　鋭い切っ先に現れる赦しを乞うような響きが　古びては
静かさを滲ませ滲ませ　踊り狂う
な眺めを　痺れた身を強張らせ　静かに見送らなければならない
のは　静かさを赦さない怒りを連ねた環の外へ身は放られた証し

で後には　色褪せた遅れだけが残され
疾っく棄てられた「でも生きなければいけないよ」
などと言う言葉（それとも
言葉で無いなら　黙った切りの裏切りか）が
贋の終わりを取り繕おうと元の静かさへ立ち向かって行くのなら
踊り狂うまでもなく　猛る静かさが静かさを傷付けて已まない姿
が　「でも生きなければ…」に添えられ
二〇二五年九月六日

つまりは何も起こらない
いや　では言い尽くされる
けれど　事も起こらない
静かさ　を盗み取る為に
まるで見た事は無くても
翼から撥ねる露の一雫に
映って消えては転げ回る

で言い尽くされて居る
なんて事も起こらない
の次に真っ先に現れる
羽音を立てる小鳥なら
聞き覚えは確と有って　その
甘みを含む彩りの塊が
なんて事は起こらない　けれどそうして

言い尽くされない事なら
荷を一つ下ろしたようなら
翼の濃い色を思い浮かべ
露に映る甘みをなぞって
露に倣い透けて行く身は
二〇二五年九月七日

確かに起こっただろう　とそれで
心は溶けては流れ出て
聞き覚えたとは何をか　に就いて
思い倦ねる儘に沈んで

眠って居た　と
瞼を幾度か叩かれて知れる　ずっと
指で幾度も瞼は弾かれて居たろう
指の力は少しずつ勢いを増し
叩かれる度に目玉は瞼の奥で狭そうに跳ね返り
遂には瞼を割いて　真っ暗な空へも飛び去ろうとしたか
それを抑えるのは　濡れるようにも輝く星にそっくりな
瞼の裏の瞼を弾かれる鈍い痛みで　けれど
その痛みを　こうして受け容れる儘で良いか　それとも

高い空を目指して　きっぱり拒むべきか
……
其処からの帰り道は薄暗い
あれは誰だったろう
瞼を叩かれて居たのは　瞼を叩いて居たのは
其処が何処だったかは　知れて居よう　但し
その自らにさえ　それは知らせてはならない
二〇二五年九月九日　幾度（いくたび）

まだ時が時かと知れるようなら　常に似た
男は二人居て（必ず
男とは　男にしか見知られない男かな影の他のものでは無い）内
一人は　時の絶えた先からの自らの帰りを待ち（
危うく　荒海を越えて陸に流れ着いたかに）　それともう
一人は　…と言おうにも　姿を描こうにも口籠もる　その
口籠もりの内で揉みくちゃにされたかに

荒海に溺れ　汚げな浜に打ち上げられた　硬そうに細長い
肉と骨の塊　血はすっかり抜かれ「
男の血に海は飢えて居た」との戯れ言は時に聞き棄てられ
時に聞き棄てられ？　と静かな辺りを顧みるなら　男を
肉と骨の塊に設えて海から　抛り棄てたのが　その男だった
‥と言おうにも　いや言うだけなら言えない事は何も無い　と
事は何も無い内で　男は自らの
甦りを乞う目を確と見開き自らの帰りを待つ絶えない時に
抛り棄てられながらも　陸に引き返せそうな勢いを付けて
捥げた腕を大きく拡げ　どう遣って泳ぐかなら思い倦ねて
二〇二五年九月十四日　陸（おか）

立ち消えて　幽かな薫りも残さない朝
そして時は　一先ず絶える　その
絶えた時を　うっかり覗き込んだとしよう　その時の
絶えた底で　古い毛を強張らせた犬（大神と綽名され）

狼が　素速い動きだけで　その姿を現して（つまり
姿は　全く　唯素速さの影の現れで）　それで
時を巻き戻そうと　呻いて居るなら　それは
甚だしく時に厭われて居るからと直ぐに分かる　その
直ぐ　が曲者で　そこから時は裂け
それを覗き込んだ者を　食い殺し取り込んで行こう
いや構わない　朝はもう途絶え　再び還らないでは
そして神は失せ　有りもしない名ばかりな昼が過ぎ
漫ろ日暮れは夜を備えるばかりに唯小作りで　さて
どう絶えたかも知られず夜に紛れるしか無いらしく
に　夜の拡がりが　独り時を治め静かに落ち着いて
大神・狼の話しを紡ぐのには　抜き差しならない訳が有る
日暮れと夜と朝は　時に随う振りをして居るだけと言う事
有りもしないで済まされて来た昼こそが時を終わらせる事
狼の話しは隠れ蓑で　その話しはどのように造られたかを
時の裂け目を覗き込んで戻れた誰も居そうに無い　それを
昼の明るみが仄めかすなら　狼の幽かな微笑みが
昼の明るみに映し取られて居よう　な思い込みの可笑しさ

そして
それとも

時を撃ち抜き滅ぼす驚き　そして何の話しも終ぞ届かない　狼
狼…　呻きとも呟きとも異なる　息の動きの素速いだけの
二〇二五年九月十五日

堕ちる女は横目で遣り過ごす　そうすれば
間違いなく女は　逃げ場も無く果ても無く　火炙りだが
その火の為にくべられるのは　女の手で縊られ骨と皮の
男の屍ばかり　にしろそれは
男が激しくそれを望んだから　で残るのは
その火の周りを　微笑みを湛えて踊り回る
淡い影達にしろ　血と肉の匂いを振り撒き
これでもか　とその
微笑みの幽かさに磨きを掛けて行く　かに
戻るべき処だけは自ら確と心得て
堕ちる女を遥か下に見据えようと　より高くへ昇ろうとする
風の中の光りさながら揺れる姿に　様様に移り変わって行け

と犬を脅すようにでも嗾けるのが　火にくべられるのを厭う
惨めに穢らわしい男達だとしたら　火には誰も手は出せない　その
火は何処で今も燃えて居るだろう
二〇二五年九月十六日

その石積みは何時も脇目で通り過ぎるだけで登らない
その上に何が有るか　きっと知られ過ぎて居るから　それを
今更に知っては　知り過ぎる者らに咎められそうで　な
石積みは周りに何も無くて　透けて漂う梯子のようで　けれど
何が石積みを漂うかに見せるのだろう　と鼻を突くのは
草の匂いで　それは
蜜の匂いが　ぬるりと濃く溢れるようで　愈愈足は遠ざかる
な儘にふらりと身が傾ぐと　蜂の姿に撃たれそうで
慌てて身を躱すと
蜂に姿を換えたか元元の蜂の身に思い当たったかで　いや
蜜の匂いが　他の何かの匂いと入れ違って居るんだ　と

何処へ踵を返したか　その何処かは何か恐ろしそうなら
霧の晴れないような頭の中に我が物顔に真っ直ぐ拡がり　其処に
強張った古い乳の匂いの欠片が　幾つも散らばって居て
霧の白さと怖ず怖ずと汚げに混じり合うようで「そうして
消えて行ったんでしょうね」何が？「その　何が？の声ですよ　それが
すっかり入れ違って居るんでしょうよ」と優しく笑われるなら
何か恐ろしそうなのは　全くその優しさの他では無くて　‐そうか
入れ違ったのはその優しさとですね‐
で　何が透けるも漂うも無くに　草の匂いの
人の裸の姿にこの身は溺れ
二〇二五年九月十七日

毎夜の何処だか何処かには　まだ
目を醒ました事の無い時が有って　とは当たりは付き
ぴたりとその時に目を醒まそうにも必ず外して仕舞う　なので
思い描くしか無いその時に　身を浸して居る積もりで　先ずは

目は瞑って耳を澄まそうか（目は要らない事を曝くばかりなので）
けれど耳とて目に倣うかに　要らない音を次次傾れ込ませようか
と　少し遅れて耳も塞ぐと　塞がれた耳とは遠く距たった辺りで
耳には届かない音が犇めく　それは数知れない人か獣の姿をして
動き回り何かを叩き捲って　現れては消えて行く　それとも
現れも消えもしないで　危うく音に寄り添い絡み付き　いや
何故　それを音と聞かなければならないのか　音に似ても居ない
例えば　目には届かないで　色の鈍い限りの煌めきかも知れない
それが果てなく　果ての無さを満たして犇めくのかも知れない
その時　人か獣かな彼等の務めは何だろう　やはり
動き回り　何かを叩き捲って　現れては消えて行く　それとも
現れも消えもしないで…と　それが
ぴたりとその時に目を醒ませ！　他にお前の身の置き処は無いぞ！
と迫って来るようなら　それに任せて目を醒ますのは望むところで
けれどどうやら　少しだけ遅れて（な遅れがきっと
動き回り何かを叩き捲って　な何かとは　この身の他で無く）
もう再び明けない夜の時を　突っ切って行く…
あれは　あの喜びは…との　声は呑んで

身を守る為か却ってそれを　遠ざけながらに
二〇二五年九月十八日

獣と人の声が様様に絡み合うなら　時も混み合う筈で　例えば
夜が明け初める前にも陽は落ちて　晩い昼が紛れ込む　その
午を回って直ぐにも真夜中の色を匿い映す時を　ぁこの今よ！
と目を瞠るのは獣か人か　いやそんな境も煩わしくて
獣と人の血の混ざり合う身の　尻を突き立て穴を拡げ　遠く
空から流れ来る尖る限りの光りを逆さの腹まで突き刺したい
な　古くから変わらない落ちぶれたようにも盛んな渇きから
今を砕いて已まない時の勢いに抗う力を　滲み出させ蓄えて
働くのでも休むのでも無くに踊るような寝返りを打つような
身ながら直ぐにも棄てられようか　と仄かに見通すだけでもう
誰かが口ずさみ疾っくに塵に塗れた小唄に縋るしか無いかに
果てない疲れをひたすらに乞い願って
眠るも醒めるも無く尻の穴の奥で息衝き逆巻く波に我を忘れ

獣も人も先ずは牝か牡かに戻って競って肉に跨がろうとする
な　尽きずに湧き出す姿らの連なりを
むざむざとぞんざいに手繰り寄せる　な
身勝手さを遠ざけずにはきっと崖から落ちるなら踏み止まり
そうして掴み取れるのは生き延びるのとは違う何か　それを
萎びた時など擦り抜けて汚れた風に転げて行く声に換えれば
凍る時の上っ面を滑るように　何の歌さえ可笑しく唄えよう
二〇二五年九月十九日

行きずりで有ろうと無かろうと　唯
男を殺め置きたい　それだけに命を懸けるのが女
その証しかに　今　男の
胸を刺した刃で　拍ち已まない血の重みを抉って
赤い白目の可笑しさに　幼児が返す掌にそっと
醒めた頬を火照らせて」で途切れる　小唄？を
誰が聞いたか書き留めたか　それとも女の手かのその紙切れには

－まだ息絶える少し前でも掠れる声なら操れる女が残した－　とでも
確かに記されてようか　いや　な事が有りそうに
知らず　さも思えて仕舞うだけで　にしても
何処からが　そう思えて仕舞う事なのだろう
抑も小唄からか？　それとも手元に有るらしき紙切れからか？
今死のうと焦る女からか？　やっと干涸らびた女の骸からか？
それとも骸など疾っくに砕け行方知れずな　昔
女の独り歩いた道を吹き澱む古びた風の匂いを
嗅いだだけのようなら　振り返られる誰の昔も　危うい限りで
二〇二五年九月二十日　刃（やいば）

獣から見れば人は間違いなく獣だろう
人を人だと見るのは人だけで
虫から見ても人は間違いなく獣だろう
人を人だと見るのは人だけで
草から見ても人は間違いなく獣だろう

人を人だと見るのは人だけで」
な事を　したり顔で言い出すのは人だけだよ　人が
獣や虫や草より劣るのは　そのしたり顔のせいだよ」
な言いようも偉そうで　したり顔だろ」ぅ
ん　顔は削り取れても　したり　からは逃れようは無いらしいな」
と　浮かぬ顔でもしてる積もり　？」
な　浮かぬ顔も　獣や虫や草には　したり顔と見分けは付かないけどね」
で　？」人を人だと見るのは人だけで
って　したり顔の浮かぬ顔の儘　人は人だけを人と見て生きるしか無いか」
ね　けれども　な儘にも何時か　獣や虫や草に
人を人だと見るのは人だけで
と　したり顔で　思われたりする日が来るとしたら」
な彼等に　人…　など好いように食い殺されて仕舞いそうだね　笑」
な兆しが　ちらちら過ぎるのが　君には見えるのか
二〇二五年九月二十二日　過（よ）ぎる

一つの息は延びて行くのを　真っ直ぐに
眺められる
長くも短くも太くも細くも
穏やかか　荒げられるかも知れないで　唯
やがては絶えるとは始めから分かって　で
それさえ分かると分かるなら
もう分からない事も何も無く　何時かその
息は引き取られて行くのを待ち望めるなら
息は
な儘に守られて息一つの外は消え　何にも
犯されはしない」と　これを
背を屈め息は潜め　思う度に繰り返すなら　この
息はする身こそ先に　知らず遠く距たって行こう
二〇二五年九月二十五日

ぼやけた眺めの中を　なので何とも見晴らしの悪い

初めての坂を　なのにずっと柔らかな足取りで登り切ると
二桁の数ばかりが大きく浮かび上がって　奥深く目に入る
懐かしい数　直ぐに何故懐かしいのかを心の中に探ってみる
懐かしい人に由縁の数か　けれど彼等の姿は立ち消えて行き
何の思い出も通り過ぎ　残るとしたら自らの
身罷る時の数でしか無さそうで　それに目を背けるべきか
いや寧ろ　確とそれを抱き締めようと走り寄るべきか　と（
二桁が　三桁　四桁　四・五桁　になって戦ぐかにも）
数は掠れ　暗く　重い風に溶けて行く　その傾く向こうの
高い窓から斜めに裸の身を乗り出し　外を眺める男は
この熱い夜の堕ちて行くのを見下ろして居よう
その瞳の中にこそ　数は映されるに違いない　で
遠く距たりながら　男の小さな瞳を抉るように覗くと
確かに瞳から食み出す程に鮮やかに　同じ数が映って
独りその数だけが　男とそっくりなこの身を　坂の上に
正しく数の姿に見下ろして居ようか　けれど
な事で終わる熱い夜では無い　きっとそれは
これら悉くが　ほんの一息の中に窒がれ匿われるから　と

な　考えを振り棄てたくて振り棄てられないのは　もう
登って仕舞っては跡形も無さそうな坂のせいに違いなく
二〇二五年九月二十六日　四・五（4.5）

風が這い上って谷底の匂いを伝える　けれど見晴るかせば
なだらかな丘しか無い　で　知らず
谷底の底を剥がした底無しの匂いを　風の中に探すらしく
昔　谷を覆って居たたろう森の姿が　この見晴らしを蝕んで
なだらかな丘に並ぶ建物を　低くへと弛弛と滑らせて行く
のなら
それを眺める瞳が底無しに違いなくに　何の匂いも拒まれ
底無しの瞳の奥は　何処までも涼やかに堕ちて行くらしい　けれど
それを妨げる一つ点された灯りが　痛みとも望みとも為り
小さい限りに一つの声で　一時に二つの名を呼ぶしか無い　その
差し迫って　怖れも安らぎも通り抜けて名を呼ばれ続ける　のは
誰と誰だろうと共に　夢は見ないと決めた二人にとっての

再び戻れない行く末をその果てまで見失わずに居たいから　にしろ
…
どうしよう　二つの声に名を呼ばれて危うく距たって行く
な　二つの姿に引き裂かれるのを繋ごうと独りで呟くには　また
声を一つに沿わす　森は枯れ砂が流れ沈むばかりな谷底の
途切れない匂いが届けられないでは行く末の果てなど嘘に　終わる
二〇二五年九月二十八日

谷底が震えるなら　其処を滑り堕ちる
粘り着く砂も　一粒一粒色を転がして震える
な　粘粘と震えて已まない汚れた塊のような昔の思い出が
遂に誰かの頭の中ですっかり消える　とそれはそっくり
この頭の中に移され甦る…　な事を
な事が昔有ったかに思い出され　にしろ残るのは
何か汚れた風の　葉音も絶えたかな吹き溜まりで　けれど
なのでこそ其処に　声は様様に震える色を換えて　な

言葉なら　色色と絡め合わせられるようで「ぁ
それはほら　あの時の事ですよね」「
あの時？」「ほらほら　二人で」「
二人で？」「君の家も僕の家も並んで谷底へ堕ちて行くのを眺めて…」「
眺めて？　さぁ他の誰かと間違えて居ませんか」「そうなら　あの思い出が
誰の頭の中で消えたのか　其処から遣り直すしか有りませんかね」「
な事なら　憶えが無くも有りませんが」「ぇ
な事とは　？」と　あの誰かの顔を
声の遣り取りの上っ面に探るようにしながらも
どうやら互いの顔は確かめようも無いと知れて
腹を据え目を見開けば嫌でも見詰めるしか無い　ざわざわとした
如何にも何人もの頭の中を渡り移って来たかに　汚れた
いや　汚れなど何の事でも無い　変わらない思い出が
いや　変わらないなら思い出でも無い　唯それっ切りに有った事が
声を締め付け声から締め出され　また何処へ移って行く「のかな…
は
二〇二五年九月二十九日

# 十月

翳る空を真っ直ぐに眺め
翳る空そのものに違いない尖って曇って鈍く青い塊が
間近に堕ちて来るのが見えるなら　疲れを重ねるようにも勇んで
それを息にしようと　喉の奥まで青く透かして吸うしか無い
鋼が跳ね続けるように　さも力に満ちて休み無く
な　空さえ失せた眺めの奥で　誰かが手を振るのは
喉の渇きを訴えて已まないからにしろ　その裸の身に抜かり無く
油を塗って砂塗れかな誰かを見殺しにしたのなら　空より重たげに
悔やむしか無かろう　その取り返しの付か無さに　息は止まる
そうして　翳る空そのものな塊は
屈む胸の底で磨り潰され　曇りも青みも混ざり合い
その汚げな痛みから逃れようと

空より遠くに　濁った目を遣り放つと
脅すように翼を拡げて昂ぶる太った鳥を象った
誰も居ない空っぽな塒に辿り着くらしいけれど　踏み込めば
其処へ逃げ込んだ翳る空が　哀れげに口ずさむのか　唯
必ず訪れる一つの終わりが　祭りの後らしく歌われ　その
掠れた節が一片ずつ　粘る砂粒が風より軽く転げ舞うかに
何処へでも無くに静かに降り積もる　その明明と透けては
果ても無く眠りを拒むような色なら　今にも断ち切れよう
二〇二五年十月一日　屈（かが）む　塒（ねぐら）　一片（ひとひら）

咎められ鎮まりそっと消え去って　喜びは確かな重しを得る
咎められない喜びは騒がしさに弾け直ぐに飛び去って仕舞う
けれど　悲しみも怒りも喜びと同じだとしたら　どうだろう
つまりどうであれ心が動くなら　そして
心自らがそうと知れるに至るなら　もう
必ずそれは咎められて居る　で

誰が咎めたのかを探っても　心の内にも外にも見当たらない
心は常に心に知れない何かに咎められずには心で居られない」
こんな話しなど全く下らないと背を向けてみよう　するともう
心は確り何かに咎められて　こんな話しに戻って来て居る
そんな心なら要らないと何処か心の外へでも出掛けてみよう
後ろから何かが足早に　それを咎めて追って来ないだろうか
そんな何かこそ此処を立ち去れと断ち切るなら　お前は
お前を断ち切るのだなと言う声に心はもう刺されて居る
そうか見付けたぞ　心は刺されて心なんだ　なぁんだ
それだけの事か　と安らう心も咎められるしか無くて
自らが自らの重しのようにのろのろとまた動いては直ぐに
咎められないでは心ごと弾けて何処へか飛び去って仕舞う
何処へ？　知れないにしろ　そんな何処かが有るだろうか
知れないにしろ　そんな何処かへ行けたとしたら　きっと
心は逆さにでもなって尖る姿を更に尖らせ　昂ぶるに任せ
心に触れる悉くを咎めては刺し続けるかも知れないけれど
それが心では無いのも明らかなら何がそれを知るのだろう
心は常に二重なんだよと嘯いたのは何時かの誰だったろう

なので

二〇二五年十月三日　二重（ふたえ）

音が
音を忘れて遊ぶように流れて行くのが見えたなら
時が其処を限りに失せて　其処を替わりに満たす
光りは
始めからずっと暖かかった
と思わせる色が　眩くも湧き出し
揺らめく度に　笑うようにも数えられて行く
揺らめく数　色の数　暖かさの数　光りの数
それらが　どれとも異なる数を互いに絡ませ
そうして眩さの数を錬り出して　白く硬い
失せた時の痕の上で
陽を凍えさせる企みを唯一つの楽しみにか　そうして
陽を恃む鳥達などが息絶え絶えに土に汚れて行くのを好むらしい
熱い調べの途切れそうにも一連なりが

音を真似れば真似る程に黙って転げて行く　其処は
始めからずっと暖かかった
の他に何も無い　なので
始めから其処へ行くし　始めからずっと其処に居るし
始めから其処に相応しい　白く硬い衣を纏い
真っ暗な昼と煌めく夜を　また逆さにして
自らの生きる姿から絶えず食み出す誰かは　それが人なら
人の形も忘れ　熱い調べに繰り返し溶けては
人と異なる形に甦って已まない　そうして
それから少し遅れて　音もまた忘れた音を思い出して
始めからの音へと親しくも初めてのように　還って行こう
な其処はきっと何処の其処でも無く　始めさえ無く暖かい
二〇二五年十月四日　眩（まばゆ）

顔が残した　時
を腐らせる　繰り返しの利かない呼び声を（

その呼び声もまた腐ったようなら）どう言い直そうか
その言い回しの目まぐるしく様様に変わり続ける　な
声の炎にすっかり包まれて焼かれるしか無いような　いや
焼かれて炭に成るなら
顔が残した　時
を裏切って　見事に出し抜けたに違いない　そうして
顔を残して　先に消えた裸の一つ身を幾つも並べる
こんもりと　真っ白な森へ滑り込み
時に向けて　白さを立ちはだからせるなら　な
裸にだけは　腐って臭う時さえ弱みを見せる筈で
その隙にやっと見出せよう唯一つの呼び声で時を劈こうか
にも　予め腐った時では却ってまた　声の炎に焼かれようか
なら　炭も贋の喩えに過ぎず声の炎も絶やす事は出来ない
で　時に残された顔を今更に探して見付からないとしたら
時とは距たる儘に生の裸を晒して正しく腐って行けようか
でも　どう遣って？
二〇二五年十月六日　生（なま）

煌めく葉風かに声を光りにまで届けられるのは
常に片脚を引き摺って居るからで　それとも
声は　その儘に片脚を引き摺るだけの事で
蹌踉めくとか倒れ込むとか躄るとかなら
閉じた口に身を預けて居れば済む筈で
なのに何故か閉じた口が黙り込んで
声に就いて声で語ろうとして居る
今
それは声では無いと拒むなら
それは黙る口の確かな声で
それはそっくり引き摺られる片脚だけが其処に（
とは　何もが黙り込む処に）
重く投げ出されるようで
疲れ知らずに　けれど
疲れ知らず　などと言えるなら疲れを知らない筈も無くに
それとも　引き摺られる片脚は丸ごと声に呑まれたろうか

それらしい声なら細切れに強い光りの降るのを間近に臨み
微かな音を鳴らす濡れた細く濃い影は真下を指す形で震え
縮むだけ縮んで光りの恐ろしさに恐れ知らずに応えて居る
二〇二五年十月七日

例えば硬い小さな欠片なら　涙が圧し流して呉れように
瞼の裏に犯した過ちの絵柄が彫り込まれては動かせない
な目では　禿げ山の連なりにやっと見付けた狭い草原を
漂い浮かぶ草の匂い　にしろ色でしか嗅ぎ分けられない
な色を　縋るように追うしか無い
けれど　草原は誰かを身も心も傷付けたくて堪らないかに
眺めの裂け目の奥へと堕ちるようにでも鋭く傾いて　ぁあ
な傾きなら　嘗てより知って覚えて居るよな　と
瞼の裏へ語り掛けずには　傾く儘の身も
眺めの裂け目へと今にも跡形無く消えそうで　でも良いよ
な為の言い草なんて幾らでも腹の底に溜まって居るからね

と

遠くで嘯くようなのは　更に遠くへ向かう風の逃げ足の速さで
な速さなら増すばかりに色の光りの届かない暗さに換わり　その
煽りを喰らうように草原の匂いも直ぐに土色に褪せる　な
土色を　瞼の裏に厚くたっぷりと塗してはどうだろう　そうしたら
彫られた絵柄も絵柄とも分からなくなって…　にしろ　その
疵とは残ろう　な見掛けだけなら小さな陰は
さも独り立ちしたいかに健気にも小さな限りな痛みへ　滲みる
それともその　何が何へでも無い唯　滲みるだけが過ぎて行くのに
目の痛みが　見開かせた暗さが纏わり付かずに居られなかっただけかな
でも良いよ　なら　あぁ暗いねえ　とか　風に囁かせれば済むからね
遠い程な風足こそ　それに打って付けで
二〇二五年十月八日

何時からかは忘れたにしろ火照る脚でずっと街を歩き回って来た
その遡れる限りの跡を　脚の骨の形だけで描いて見せて欲しいな
と　振り返るべきか　前を見詰め直すべきか　恐らくはその

どちらかを選んでは見損なって仕舞おう　その歩いて来たのが
男か女かさえ　今　立って居るか倒れて居るかさえ
いや　そうして掠れて消えそうな姿こそ　求められての事なら
その誰かの　棄てられて燻んで行くばかりな草に埋もれ掛ける顔は
その骨だけの形を縁取る光りに浮かぶようにして
涸れた淵の底へ　さも重い水に沈むようにも静かに堕ちて行く
後にはそれを凝っと見下ろす生温かい生白い小さな仄かな陰かの
裸の身一つなら震えるように呟くように「…骨なら教えて欲しい
火照る脚は環を描いたか　にしろ環は閉じたか断ち切られたか
男は女で女は男だったか　にしろ二人の戯れも絶ち切られたか
草の色が血の匂いと骨の形を奪い合うように分かち合うように
二〇二五年十月十二日

端から花は傷だらけで　それとも
花は傷の端から絶えず零れ溢れる
な事より見渡す眺めこそ傷だらけで

すっかり傷に塞がらないでは　この
眺めは傾く儘に何処へか流れて行く
危うい限りにもう震え出すその先の
向かい端へと掌を翳すように抛るように眼を二つ並べて据える
と　その眼の間に　傷の零れる形で蕾の綻ぶ形に必ず花が咲く
傷だらけの眺めなら　それを裂くのが定めのように　そうして
端から眺めは自らを裂いては傷の花に自ら埋もれ動きを止める…
何処へか流れて行くのは花なら端から傷の眺めの薫りばかりか
二〇二五年十月十三日　端（はな）

人の形にくっきりと現れるなら　人で無いのを証して居る
人は人の形の忘れられた処でしか人としては動けない　なる
人が　な人で無しに誘われ自らの　為に煌めく星の形の花を
追う　嫌でも他に出来る事は無く　強いられる儘に　いや
自ら進んで一つ限り望める限りに　身を奮い立たせて居る
な花の煌めきは良しとしても星の形の嗤うべき重重しさが

更に重重しい高みを切り開く　な空より脹れる道に導かれ
更に高みで待つらしい人で無しの思う壺かに勇み転げ出る
そちらへ…　けれど　あと少しの処で足を掬われ引き返す
人の形は忘れられても掬われる　足ならどうやら有るらしい
それこそを急いで嗤うべきなら　少しも嗤えない替わりに
重重しさに背を向け踵を返す清かさを激しく乞うしか無い
で堕ちて行くにしろ　な身は清かさを追い越して滑らかで
それが人の形の人で無しを蹴散らすのか　そうして出来た
触れられそうにざらりと平たいとは分かる騒がしさの底へ
放たれる…　人の形の思い出される儘に身は縛られるかに
二〇二五年十月十四日　誘（いざな）われ

甘い水を求め疲れ知らずの足任せで何処へとも
光りに誘われる儘に　力も漲り彷徨っては来た
のは愚かな思い込みで唯　光りを出し抜こうと企んでは
影ばかりを　その苦い暗みに惹かれ　盗もうと逸って居たろう

光りの速さの向こうを張って　速さを纏った積もりで
な速さは失せれば　影も光りを剥げた幻かに失せ
光り限りの中へ身は擲たれ　それを激しく厭う光りから汚げに
鋭く深い環が次次に吐かれ　その
崩れそうにも接がれる環の並びを
要らないもののように禍禍しげに貫く
殆ど血も通わず痺れ切った硬い片腕は
影を欺くように曲がるなら　幾ら青ざめた膚色を偽ろうと
見掛けばかりで中は虚ろで　其処を低く水が通って行くような
幽かな響きが籠もって震え　それを真上を向いて聞く片耳の
奥へと真水が滴り落ちては　これが何時ものの夢なら根深く悔いて
耳を満たす程に跳ね回る真水に焼け爛れるのを恐れる片耳か　いや
もう疾っくに　もう一つの片耳までも幽かな響きは確と届いて居よう
けれど何時もの夢なら剥げるように夢は夢から覚め
僅かばかりな甘い水が独り　虚ろな片腕の中を静かに流れて行く
それを悔いても　その悔いも光りを剥げた幻かに失せ　そうして
少しずつにしろ　その剥き出しの光りが光りを剥がして棄てては…
二〇二五年十月十五日　誘（いざな）われ

誰かにそっくりなせいで間違いなく　その
誰かでだけは無い男が　まざまざと白い顔を晒し
その儘に近付く程に背が低くなる　のは見誤りで　それは
こちらへ床が傾くせいで間違いなく　それは
男が何かにそっくりな事を言い継ぐ為に来て　その
誰かに似て居ないせいでそっくりな囁き声が暈けて届くけれど
何かにそっくりなせいで間違いなく　その
何かでだけは無い事が　有り有りと語られよう　にしても
日毎そっくり同じに必ず起こる事しか語られず
起こる事は日毎そっくりなせいで間違いなく　その
事でだけは無い事が　汚れた床の窪んだ底に
甚く見難い醜い姿で横たわる　それを
日毎踏み付けなければならない苦しみ痛みを
日の数を正しく数えては和らげ狭めて行くなら　その
ささやかな楽しみは楽しみにそっくりなせいで

楽しみでだけは無い　では何なのか
の答えは　それが何にそっくりかでは明かされない　ふふん
な事は分かり切って居るぜ　と　したり顔の男はやはり背が低く
床の傾きに磨り潰される影のように去って行く　その
影の痕らしき辺りをまじまじと眺め下ろせば　其処は
其処にそっくりなせいで間違いなく　其処でだけは無く
其処で無い狭く窪んだ床の底は　唯見窄らしく　それは
見窄らしさに少しも似て居ない　それは見窄らしが　その
そっくりをそっくり吐き出したからで　その
吐き出されたそっくりが独り　苦しみ痛みを置き去りにして
見渡す限りを　見窄らしくも　で無くも　覆い尽くすなら
誰かにそっくりなせいで間違いなく　その
誰かでだけは無い男なども　この世の何処にでも見掛けられ
何処かにそっくりな眺めの中を　何処でも無くに眺めながら
日毎そっくりな形をして　知らぬ顔で彷徨き回っても居よう
なら間違っても　例えば「
男はこの私に似て居ないせいで私だろう」などと
口にそっくりな口を　滑らせるべきでは無いのに

な事が疾っくに起こって居るのでなければ　誰も
誰かにそっくりなせいで間違いなく　その
誰かでだけは無い
二〇二五年十月十六日　形（なり）

そっくり同じ時が来ては
既に来たと知れて居た筈の物が二つ　また回り出して
此処が此処だとは知れなくなる（物の内の　一つが此処
もう一つが　もう一つでも無い此処に据えられ）そうして
強いられるように眠くなると
呑んだ石でも吐くのを強いられるように
坂にしては崖　崖にしては坂を
駆け下りるか　転げ落ちるかして　快く
来てはならない　と今やっと心付く
そっくり同じ時に　馴染んで行く
時を切り回すように　時に斬り殺されるように

でまた今の今やっと　始めから
そっくり同じ時など　少しも時では無かったと
壁に凭り掛かる誰かの姿を冷たく見過ごす心持ちで
見下ろされる此処の　此処で無い儘に高ぶる醜い様を
冷たいよりも頑なに　哀れげに見放してみる　それでも
そっくり同じ時が来ては
二〇二五年十月十九日

そっくり同じ人の姿が来るなら
そっくり引き取るしか無かろう　けれど誰が？
と　な誰がの誰にも係わらない顔付きを拵えて　それが
こちらへ巡って迫って来るのを他人事に違いなくに眺めながら
そっくり同じ時がまた来るのを　易易と数え直す振りをする　な
楽しげに己の影を消す歌なら　同じ時毎に繰り返し歌えるように
で　その歌はもう同じ時さえ擦り抜けて
その片言さえ微かにも擦り切れさせずに

片時も同じで無く変わり続ける時さえも　踏み躙って
歌い已まないらしいけれど　それはどうにも
そっくり同じ時を呼び招き　その
そっくり同じ時に帰る身振りその儘では無いのか
そっくり同じ人の姿が　そう語る為に来たのなら
二〇二五年十月二十日

卵の形に艶めいて疵一つ無い石を見付けると足は止まり
通り過ぎる訳には行かなくて
こんな物はうっかりとも拾ってはいけない筈が
拾って仕舞って　つい　凝っと見詰めて居ると
卵の形の艶めきは　古くから定まった手筈通りかに失せ
換わりに現れる筈の　卵そのものの形が
はっきりとは見えて来ないし
指と掌に触れて来る何も無い　ならと　その
石を裏に向けると

卵の形を鋭く窪ませた深い傷しか目に映らずに
で　拾ったのが石では無いのは分かったにしろ
そう分かるばかりが徒か　目は何処までも深く
傷の奥を覗き込まずには居られずにも
堪らず目を切ろうと焦ると　傷の奥から現れるのは
卵の形に艶めくかにしろ直ぐに　もっと尖って硬そうな
見た通りなら全く石なのか　もしそうなら
石が産まれて来るのを目の当たりにして居るのか　と
それに目を瞠る目こそが先に石に変わって行きそうで
改めて　その石の目で傷の奥を覗き込むと奥の奥では
やはり卵の形が艶めくか　‥な当ては外され
何の味も為なさそうな　色も能く分からない
鳥の雛の息の匂いを放つらしい水が滲んで溜まって
直ぐにもの眠り込んで硬く丸めた身を　匂う水に落とさなければ
直ぐにも命を落としそうで　命を落とすなら落とすで
それを待って命を落とした身一つは
疵一つ無い石に卵の形に艶めいて映らないだろうか
そうと知られて　落とした命にどうなろう

二〇二五年十月二十三日

十一月

藪が道を逸れれば道は終わるらしく
それに途惑うらしい藪が常と異なる光りを月明かりから吸い出して
自らに浴びせて居る　その色を
途絶えた道が　それとも唯道の影が
盗もうとして　燃やそうとして　月から隠れて
白い長い獣を　もう道は通り抜けられないなら
彷徨かせては　月明かりを白粉替わりにするかして
粧わせて居る　なら
粧うとはそんな事でしか無くて　な
そんな事が　それだけで藪を裂いて

月明かりの果ての無さへ溺れて行く　なら
居たたまれないかに　藪の裂け目へ
月明かりにずっと隠されて居た　眩し過ぎるなら
薫りとしか映らないらしい光りが静かに躍り始め
そんな事に　絡み付いて已まずに
誰を慰めようとして居るのだろう　いや
誰でも構わないが　その誰かが自らの道を擲って
藪に埋まって自ら息絶えようとしては
な　冷たくなった身を粧わせたくては
唯息を継ぐのさえも　何時までも已められないのでは無いか
と　思う間の一刺しの　ような短さ　絶えた道の影よりずっと
二〇二五年十一月四日

若くも無く　老いるまではまだ間の有る
黙るしか無い女の体は　その儘に耳に届く言葉になる
などと　死ぬ女をしか繰り返し語らない女にはうんざりするよ」「

など　如何にも女で無い女なら言いそうで」「…で
あなただけは　死ぬ女を語り続けて死なない訳か　ふふん
若いからじゃ無く（若い女から先に死んで行き　まるで
この世の始めの女かの）　あなただけが生き延びて
様様な女の悪足掻きしながら朽ち果てる姿を取り集めでもするように」「
微笑みの絶えない唇がそうして仕舞うかな　いや
唇など　虚ろを暗く隠すだけの肉の厚みで
これは　耳の為せる業に違いなくて　ぁあ
私の耳はもうずっと前に　錐で突き通され　その
真っ直ぐな穴を鋭く吹き抜く風から見れば
二つの目玉も　干涸らびた虚ろでしか無い　で
独り耳が聞き取るのは　高くから低くへ黙って穏やかに流れる
一筋の声ばかり　それとも唯
な声の幻に随う事しかしない耳なのか
などと　誰が尋ねるでも尋ねられるでも無くては　楽しげに
風に冷えて已まない凍る耳は　死ぬ女の体をまた繋げて行こうね」「
ふふふ」「…なんて笑って居るのでは無いとだけは　流石に
あなたにだって分かろうね　もうこれっ切りに黙って終わるからには

二〇二五年十一月五日

陽よりもずっと古い光りが溢れ零れる儘に
黴臭く流れ拡がる（なので
陽など疾っくに腐って頽れ）
産まれるより古い命のように　なので影も無く（
それとも影も全く光りの内で）　何処もが平たく
その真ん中で独り青ざめるのは　命より古く　形より古い形
それとももう形とも異なるなら　箱の中の鳥の姿にでも成り済ました
唯　声とだけ薫るかに　戯れに
陽を真似て腐って頽れる　振りをして
この星の醜さを探りに来たらしい　その手付きは
花の堕ちた一片をそっと抓んで揉むような　その
皺だらけの凋れた様も　微笑み返せるような一人の男（何故男か　なら
その姿が見出されるまでは丸丸とした若い女ばかりが犇めいて居たから）
に導かれるしかない　な

この身がこの身を顧みると
冷え切って乾いた目は　光りより古い光りに射られるようで
それとも疾っくに光りとも異なるなら命の古里にでも成り済ました
唯　平たくだけ消え失せては現れ直すのを已めない　明るい眺めが
陽を乞うかに暗み泥んで　其処から独り除かれた目なら蕩けて転げ
掌の上で　光りより古い光りに揺らぐ水の音そっくりに鳴って
醜く凋れた花の一片を　その失せたら薫りに縋るように真似ては
短く途切れて掻き消されるように　そうして何とも知れなくも
小さ過ぎて絶たれるばかりな一つの叫びで有り続けるしか無い
二〇二五年十一月六日

一つの息が美しさを粧って堕ちて行くのを　どうしよう
その儘に昇って尽きないとも見直すしか無かろうかにも
溶ける筈の無い岩が溶けた痕の入り組み窮まる襞の内の
光りも届かない奥にも同じ息は青過ぎる空を映すように
肉を貪るように崩れては離れ小島にも似た染みの周りを

巡って行く　けれど島と見えたそれは鳥の声では無いか
ならそれは　鳥を真似た一つの息の艶も響きも失っては
嗄れた年寄りのぼそぼそとした話し声に聞こえるばかり
でやっと浜辺に臨んで島の数を数える事が出来るけれど
数え尽くせば目に映るのは間近の島と次の島の二つだけ
でその先には翳んだ島影さえ見当たらず年寄りの声さえ
探せば探す程に静けさに弱い心は痛め付けられるようで
その生傷が息を吐けば徐に鳥の姿に変わって行くようで
二つの島は潮に圧され近付いて鳥を導こうとするらしい　その
何処へかを知りたいならまたも嗄れた声を追うしか無い　かと
後ろ姿独りが　緩い風から剥がされるように歩み過ぎる
二〇二五年十一月二十日　嗄（しわが）れた

その人は年老いてだけ見える男で　けれど
全くの幼児の顔を常に明るませて　なので
影だけなら女に見えて　それとも影の中に

透けて見えない女が隠れて居るか　確かに
掠れる女の声が遠くから揺れて届くようで
それを嗄れた男の已まない声が掻き消して
それで程合いは保たれ来る者を巧く導いて
その者の心をすっかり虚ろに穏やかにして
その儘眠り扱けるようにも狂い死にさせて「いや
始めから　あの女に狂わされて死にたかったんだろ」
あぁやっぱり　男の声じゃそんな世迷い言ばかり…
影の女は　透けて見えない中を追い続けて行けば
その女の母の母の母の母の見事に若い盛りの
すべすべした石のように冷たい頬をした娘で
そのせいでか何も語り掛けては来ないけれど「いや
お前のその声で　娘はその知る限りを語って居るさ」
そうか　じゃ男はあの娘の娘の娘の娘の娘が産んで
それで　何時までも幼児の顔をして居られるんだな
二〇二五年十一月二十二日

ぼやけた月の光りのせいで却って暗い水の上を滑って行く
三人の女と一人の男へ声を掛けようとしたか　喉が閊えて
柔らかな言葉を探して手元の紙に片言を弄り回してやっと
言葉を少ない限りへまで窮めても　そうして
蹌踉ける身の温もりが　そっと失せるにしても
ほんの後一息が　ほっそりと加えられるだけでは
彼等が身を寄せ合って通って来た狭い道に就いて語られた
その話しを聞くより早くに見上げられて居た空色は　褪せるばかり
に　その道が寂しさに賑わうようなら
傷めた脚を引き摺るかに心はまた怯んでは　きっと見てはならない
見えない後ろで　女達の脚は蛇のように編まれた縄に繋がれ
何時の間にか後ろへ回った男が　その縄を掴んで懈そうに揺すり
水の音より澄んだ入り組んだ響きを鳴らし　それを慰めとするらしい
な事は　な事でどうにも為らないとして
女三人の体が若さを保つ為か少しずつだが何処までも冷えて行くなら
男一人は見る見る年老いて　けれど

女の肩越しにこちらを眺める素速い目付きだけが
幼さを極めるように煌めかせて已まないのは
この怯んだ心には更に逃げ場さえ失うようで
二〇二五年十一月二十七日

## 十二月

暗い口笛の奥に更に暗く覗く
星を跨ぎたいらしい虹に溺れる女の姿
と並んで　そっと前を向いて若若しくも
小さな絵に収まって居るのは　誰
にしろ　その女と別れて再び出会えない
そうでしか無いのならそれで良いのだよ
と　掠れて行く口笛に諭されるようでも

女のようには　まだ溺れ足らない心が探す虹は
虹とは似付かない　項垂れる黒い犬の這うようにも足早な姿で
けれど別れを甚く恐れながら一言も咆えないのなら犬では無い
化けの皮が剥がれるように　その姿は
あざとい目付きで彼独りの神にでも祈るしか出来ない
犬にさえ素通りされよう　痩せた森の影のように隙間だらけで
絵の中に収まって居られた頃に
見ようともせずに見損なった虹の下に明るむ遠い眺めを顧みるのか
独りな今こそその時と消えよう消えようと絶える息などを探しては
何処までも奥深い口笛の暗い眺めに　先を塞がれ目も翳むなら
せめて犬のようにでも唯　咆えたいらしいけれど
二〇二五年十二月四日

転た寝に脚を探す
遠く離れ脚は貴い　それを
光りに目を射られたいかに覗き込んで行く彼等は

光りに温和しく随うように溶けて行く
ので無いとしたら　きっと何も残らない　そして
何も残って居ない
からこそ甦るのは
脚の主に一声で必ず伝えなければならない　事柄
けれど　言葉にして居たのでは遅過ぎよう　なら
もう声は届いて居なければならないのではないか
拍ち已まない血の速ささえ一眠りの内に追い越し
それに遅れて来る血になら脚の型も取れるのでは
恐る恐る　そして
な怖れだけでなら
何も残って居ない処へとも　独り向かって行ける　そして
型に光りを流し込めば　探し求めた通りを見て取れる筈で
脚さえ忘れられて
二〇二五年十二月五日

頽れた階に恐る恐る足を掛けて行く
かに切れ切れに巡る淡い眠りの縁が
継ぎ接ぎされ見えない光りを受ける
かに現は虚ろに覗き込まれ　荒ぶる
震えに形も無くした心に届けられた
痛み　が掠れて消えて昇って果てて
静かに思い描かれるのは　また甦る
痛みへの痛み…　こうして果て無く
ゆっくりと何処へも行かずに揺蕩う
痛みを慈しめるなら暗い鏡のように
この今は今を限りに味わい尽くされ
鏡のまた鏡の中へと現は溶けて行く　そうして「あれは
夢だった」と言うなら　どの夢も嘘でしか無いと知れて
二〇二五年十二月六日

風に浮かぶ光りの塊に息絶えた獣の匂いが移り

溶けるように崩れるのは光りでも匂いでも無い
と見て　傍らに立ち尽くす儘　葉音を戦がせる
木立か　と騙られた筈の古い静けさ
から騙り直されれ　粘粘と震え纏わる　‥いぃや
な眠りを乞う凍るような心が心に湧き出す様を
心で無しに　心を抛り棄てる心の翼かに揺るがせ
揺るがせ閃かせ　それでもまだ振り棄てられない
振り棄てられないなら　それはまた戻るしか無い
何処へ
と覗き込まれ　ふわりと淡く白い厚みが触れて来る　獣かに
なら其処から　深みに耽る言葉のひたすらな足らなさ独りが
静けさなどを　その贋の揺らぎを匂わせ振り撒いては獣かに
騙り納めるか　凍り戯れる内にも（けれど
もう已めて仕舞おうよ　なる真似は
二〇二五年十二月二十八日

片　２０２５

著者　u_

© 2026 u_　但シ死後ノ著作権ハ放棄スル。

Independently published